

64-244



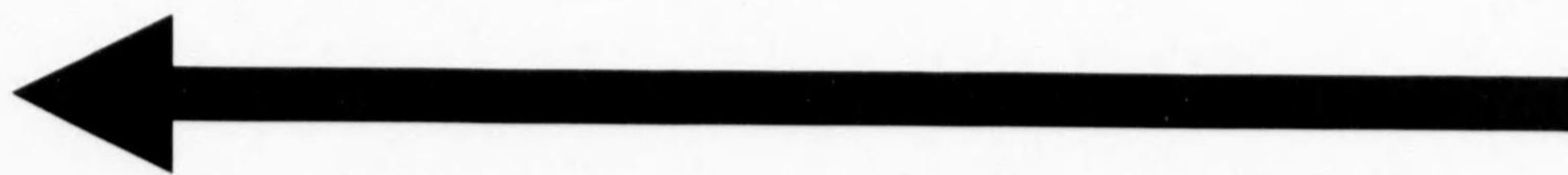
1200501278093

54

244



始



KI 671-16



大久保利通文書

忠重君



回南史
籍歸唐

一 征夷大將軍職

右の如く退去の事は、御代に於ては、
 中大幸、御代に於ては、御代に於ては、
 何れも、御代に於ては、御代に於ては、
 宜下、御代に於ては、御代に於ては、
 尊安、御代に於ては、御代に於ては、
 名指、御代に於ては、御代に於ては、
 朝代、御代に於ては、御代に於ては、
 幕府、御代に於ては、御代に於ては、
 御代、御代に於ては、御代に於ては、
 桑、御代に於ては、御代に於ては、
 申、御代に於ては、御代に於ては、
 横海、御代に於ては、御代に於ては、
 朝代、御代に於ては、御代に於ては、

一 其

次方、御代に於ては、御代に於ては、
 御代、御代に於ては、御代に於ては、
 御代、御代に於ては、御代に於ては、
 御代、御代に於ては、御代に於ては、
 御代、御代に於ては、御代に於ては、

其

御代、御代に於ては、御代に於ては、
 御代、御代に於ては、御代に於ては、
 御代、御代に於ては、御代に於ては、
 御代、御代に於ては、御代に於ては、
 御代、御代に於ては、御代に於ては、

二

御代、御代に於ては、御代に於ては、
 御代、御代に於ては、御代に於ては、
 御代、御代に於ては、御代に於ては、
 御代、御代に於ては、御代に於ては、
 御代、御代に於ては、御代に於ては、

緒言

不肖等先考ノ文書ヲ蒐集スルコト茲ニ年アリ書翰建白
 意見書覺書等ノ原本竝ニ寫本積ンテ千八百餘通ニ及フ
 今其中ヨリ事ノ公私ヲ問ハス史料トシテ重要ナルモノ
 ヲ撰ヒ之ヲ年月順ニ整理シ大久保利通文書ト名ツケ卷
 ヲ逐ウテ上梓スルコト、爲セリ

本文書ハ嘉永四年六月廿八日先考二十一歳ノ時ニ始マ
 リ明治十一年五月十四日四十九歳殞命ノ日ニ終ル其間
 實ニ二十九年ニ亘ル而シテ其文書ハ種々ノ事情ニ由リ
 或ル時代或ル個人ニ偏シテ特ニ多ク存シ緣故深キ人ニ

シテ往復書翰ノ比較的乏シキアリ之ヲ通觀シテ多少均
衡ヲ缺クノ憾ナキニシモ非ス且ツ先考歿シテ既ニ五十
年其文書ノ散佚セルモノモ亦尠ナカラス是等ハ今後更
ニ蒐集シテ他日之ヲ増補センコトヲ期ス
本書ハ其印刷ニ際シ成ル可ク原本ノ態ヲ存セントシ多
ク變體假名ヲ用ヒタリ又其内容ニ就キ簡單ナル按ト解
說ヲ加ヘ參考ノ爲メ他ノ文書ヲモ所々ニ挿入セリ而シ
テ敬語ハ島津三條岩倉三家以外ハ概ネ之ヲ省略セリ
本書ノ題簽ハ島津忠重公ニ揮毫ヲ請ヒ解説ノ起草ハ島
津家編輯所編輯員有馬純彦氏ヲ煩ハシタルモノ多ク原
稿ノ整理校正等ハ專ラ維新史料編纂官薄井福治氏其勞

ヲ取ラレ同編纂官勝田孫彌氏亦其間ニ在リテ斡旋セラ
レタルハ孰レモ深ク感謝スルトコロナリ
輓近維新史ノ研究盛ンニ行ハレ其著述ノ公刊セラル、
モノ勝ケテ數フヘカラス是レ洵ニ喜フヘキモ正確ナル
史料ニ據ルニ非スンハ却テ後世ヲ誤リ人心ニ影響スル
コトナキヲ保セス日本史籍協會茲ニ見ルトコロアリ博
ク維新史ニ關係アル諸家ノ史料ヲ探リ其刊行ニ從事シ
修史ニ裨益セルコト頗ル多シ同會ハ曩キニ先考ノ日記
二卷ヲ上梓セシカ今又浩漣ナル文書ヲ印刷ニ付セラル
不肖等ハ先考ノ五十年忌ニ當リ本書ノ刊行ヲ喜フト共
ニ仍ホ此機會ニ於テ先考ノ文書ヲ藏セラレタル諸家カ

緒言
四
原本ヲ貸與シ或ハ寫本ヲ寄贈セラレ其他種々ノ便宜ヲ
與ヘラレタルニ對シ衷心ヨリ謝意ヲ表セント欲スルモ
ノナリ

昭和二年九月

侯爵大久保利和
伯爵牧野 伸顯
大久保利武

大久保利通文書第一目次

卷一

- | | | | | |
|---|------------|----------------|-----------|----|
| 一 | 森山與兵衛あての證文 | 嘉永四年六月廿八日 | 一頁 | |
| 二 | 森山與兵衛への書翰 | 安政元年閏七月廿五日 | 二 | |
| | 【参考】其一 | 有村雄助等より大久保への書翰 | 安政六年三月廿九日 | 四 |
| | 【参考】其二 | 樺山三圓より大久保への書翰 | 安政六年六月二日 | 五 |
| 三 | 樺山三圓への書翰 | 安政元年十二月六日 | 六 | |
| 四 | 樺山三圓への書翰 | 安政三年四月三日 | 七 | |
| 五 | 菊地源吾への書翰 | 安政五年十二月廿九日 | 九 | |
| | 【参考】 | 菊地源吾より大久保への書翰 | 安政六年正月二日 | 一三 |
| 六 | 樺山三圓への書翰 | 安政六年正月四日 | 一七 | |
- 目次

七 堀仲左衛門有村雄助への書翰 安政六年九月四日 二〇

【参考】有村雄助等より大久保への書翰 安政六年八月廿三日 二二

八 藩主への上申書 安政六年九月 二六

【参考】其一 吉井仁左衛門より父への書翰 安政六年九月 三〇

【参考】其二 薩藩同志者姓名録 安政六年 三二

九 藩主への上申書 安政六年十一月 三四

【参考】久光公より大久保への書翰 安政六年十一月六日 四一

一〇 藩主への上書 安政六年十一月十九日 四一

一一 菊地源吾への書翰 安政六年十二月 四四

【参考】菊地源吾より大久保等への書翰 萬延元年二月二十八日 五二

一二 久光公及び家老島津下總に呈せし嘆願書 萬延元年二月 五五

一三 堀仲左衛門への書翰 文久元年六月十九日 五七

一四 御小納戸昇進祝宴案内の名前書 文久元年十月 五八

一五 堀次郎への書翰 文久元年十一月十八日 六一

一六 堀次郎への書翰 文久元年十二月五日 六四

一七 同志姓名録 文久元年 六六

一八 久光公上京道中警衛等言上の覺書 文久二年三月 六九

【参考】其一 平野國臣より大久保への書翰 文久元年十二月十四日 七二

【参考】其二 眞木保臣より大久保への書翰 文久二年三月十八日 七二

【参考】其三 眞木保臣より大久保への書翰 文久二年五月二日 七四

一九 利通日記抄(西郷と耦死を謀るの條) 文久二年四月 七五

【参考】本田親雄より税所篇への書翰 明治三十一年一月十九日 八〇

二〇 久光公へ言上の覺書 文久二年五月十三日 九〇

二一 堀小太郎への書翰 文久二年七月七日 九〇

【参考】周布政之助より大久保への書翰 文久二年六月十一日 九二

二二 堀小太郎への書翰 文久二年七月十日 九三

二三	生麥事件に關する傳達書	文久二年閏八月十五日	九四
二四	小河彌右衛門への書翰	文久二年閏八月廿二日	九八
二五	吉祥院への書翰	文久二年閏八月廿九日	九九
二六	有村幸藏への書翰	文久二年九月廿八日	一〇一
【参考】	父次右衛門より一藏への書翰	文久二年六月廿九日	一〇三
二七	岸良七之丞への書翰	文久二年十月八日	一〇七
二八	藤井良節への書翰	文久二年十月十三日	一〇八
二九	小松帶刀への書翰	文久二年十月廿九日	一一一
三〇	小松帶刀への別啓書翰	文久二年十月廿九日	一一九
三一	桂右衛門への書翰	文久二年十一月十六日	一二〇
三二	中山中左衛門に贈る書	文久二年十二月二十一日	一二三
三三	中山中左衛門への書翰	文久二年十二月廿五日	一二九
三四	中山中左衛門への別啓書翰	文久二年十二月廿五日	一三九

三五	中山中左衛門への書翰	文久二年十二月廿五日	一四一
三六	言路洞開の達書艸案	文久二年	一四二
三七	藩大臣方心得言上書	文久二年	一四三

卷 一

三八	中山中左衛門への書翰	文久三年正月九日	一四五
三九	中山中左衛門への書翰の別紙	文久三年正月	一五一
四〇	中山中左衛門への書翰	文久三年正月九日	一五七
四一	小松帶刀への書翰	文久三年三月廿四日	一六二
四二	小松帶刀への書翰	文久三年三月三十日	一六七
四三	長崎御付人への通達書	文久三年四月十七日	一七二
四四	久光公上京に關する意見書	文久三年六月	一七三
四五	姉小路少將暗殺に關する意見書	文久三年六月	一七六
四六	市來正右衛門外五名役目轉免覺書	文久三年	一七八

四七 島津求馬への書翰 文久三年七月七日 一七九

【参考】横濱發行英字新聞薩英戦争記事譯文 文久三年七月 一八〇

四八 岡部豊後への書翰 文久三年九月朔日 一八一

四九 高崎猪太郎への書翰 文久三年九月十一日 一八三

五〇 島津求馬への書翰 文久三年九月二十七日 一八五

五一 新納嘉藤次への書翰 文久三年十月三日 一八七

五二 長藩事情聞書 文久三年十月 一八八

五三 島津求馬への書翰 文久三年十二月十一日 一九〇

五四 久光公より板倉閣老への書翰案 文久三年十二月 一九四

五五 島津求馬への書翰 元治元年正月三日 一九七

五六 奈良原幸五郎松方助左衛門への書翰 元治元年正月五日 二〇〇

五七 黒田嘉右衛門への書翰 元治元年二月十五日 二〇四

五八 諸藩志士行動覺書 元治元年三月 二〇五

五九 新納嘉藤次への書翰 元治元年四月二日 二〇七

六〇 島津求馬への書翰 元治元年六月廿六日 二一一

【参考】石河確太郎より大久保への書翰 元治元年五月六日 二一四

六一 藤井助市への書翰 元治元年七月四日 二一六

六二 開成所に關し藩廳への上申書 元治元年七月 二一七

六三 薩藩より朝廷への建言書案 元治元年八月 二一九

六四 郡山一介への書翰 元治元年九月十日 二二一

六五 折田要藏への達書 元治元年九月十一日 二二三

六六 大島吉之助への書翰 元治元年十月六日 二二五

【参考】其一 大島吉之助より大久保への書翰 元治元年九月十六日 二二九

【参考】其二 大島吉之助より大久保への書翰 元治元年九月十九日 二三六

六七 小松帶刀への書翰 元治元年十月 二三九

【参考】小松帶刀より大久保への書翰 元治元年十一月十九日 二四三

六八 汾陽次郎右衛門への書翰 元治元年十一月九日 二四七
 六九 時事に關する意見書 元治元年 二四七
 七〇 軍政改革に關する諮問案 元治元年 二五一

卷三

七一 久光公への上申覺書 慶應元年正月 二五三
 七二 蓑田傳兵衛西郷吉之助への書翰 慶應元年二月二日 二五四
 【参考】土方久元日記抄 慶應元年二月 二五八
 七三 蓑田傳兵衛西郷吉之助への書翰 慶應元年二月二十四日 二五九
 七四 蓑田傳兵衛西郷吉之助への書翰 慶應元年三月六日 二六六
 【参考】其一 朝廷より所司代への御沙汰書 慶應元年三月二日 二六九
 【参考】其二 傳奏より所司代に達したる箇條書 慶應元年三月二日 二七〇
 七五 蓑田傳兵衛西郷吉之助への書翰 慶應元年三月十五日 二七〇
 七六 小松帶刀への書翰 慶應元年三月廿六日 二七二

七七 軍事取調方御沙汰の取次書 慶應元年四月 二七四
 七八 伊地知壯之丞への書翰 慶應元年五月十二日 二七五
 七九 小松帶刀への書翰 慶應元年閏五月廿七日 二七八
 八〇 小松帶刀への書翰 慶應元年七月十九日 二八三
 【参考】西郷吉之助より大久保蓑田への書翰 慶應元年八月廿三日 二八六
 八一 桂右衛門への書翰 慶應元年七月廿九日 二八九
 八二 石垣銳之助上野良太郎への書翰 慶應元年八月四日 二九一
 【参考】慶應元年薩藩英國留學生人名表 三〇一
 八三 西郷吉之助吉井幸輔への書翰 慶應元年九月十五日 三〇三
 【参考】西郷吉之助より大久保への書翰 慶應元年九月十七日 三〇五
 八四 西郷吉之助への書翰 慶應元年九月廿三日 三〇七
 【参考】中根雪江秘記抄 慶應元年九月 三一
 八五 中根雪江酒井十之丞への書翰 慶應元年九月廿八日 三二三

- 八六 西郷吉之助 養田傳兵衛への書翰 慶應元年十月七日 三二五
- 八七 外島機兵衛への書翰 慶應元年十月十三日 三三四
- 【参考】 藤井宮内より大久保への書翰 慶應元年十月十一日 三三六
- 八八 伊地知壯之丞市來六左衛門への書翰 慶應元年十月十三日 三三七
- 八九 岸良七之丞への書翰 慶應元年十一月十一日 三四三
- 九〇 伊地知壯之丞市來六左衛門等への書翰 慶應元年十二月六日 三四七
- 九一 新納嘉藤次への書翰 慶應元年十二月廿一日 三四九

卷四

- 九二 西郷吉之助への書翰 慶應二年正月廿四日 三五三
- 【参考】 毛利敬親公父子より久光公父子への書翰 慶應元年九月八日 三五七
- 九三 西郷吉之助への書翰 慶應二年三月十九日 三五九
- 九四 木戸孝允への書翰 慶應二年四月二日 三六〇
- 【参考】 木戸孝允より大久保への書翰 慶應二年五月十八日 三六三

- 九五 中村鐵彌への書翰 慶應二年四月五日 三六四
- 九六 井上石見への書翰 慶應二年四月八日 三六六
- 【参考】 岩倉公より井上石見への書翰 慶應二年二月八日 三六七
- 九七 島津伊勢岩下佐次右衛門等への書翰 慶應二年四月十九日 三〇七
- 【参考】 其一 薩藩征長出兵拒絶の上申書 慶應二年四月 三七六
- 【参考】 其二 薩藩主署名の出兵拒絶の添書 慶應二年四月 三七七
- 【参考】 其三 西郷吉之助より大久保への書翰 慶應二年五月廿九日 三七八
- 九八 利通板倉閣老應對報告書 慶應二年五月 三八三
- 【参考】 岩下佐次右衛門より大久保への書翰 慶應二年六月廿九日 三九七
- 九九 西郷吉之助吉井幸輔への書翰 慶應二年五月十五日 三九八
- 一〇〇 小松帶刀への書翰 慶應二年六月八日 四〇二
- 一〇一 中村鐵彌への書翰 慶應二年六月八日 四〇五
- 一〇二 中村鐵彌への書翰 慶應二年七月朔日 四〇六

一〇三 品川彌二郎への書翰 慶應二年八月十二日 四〇七

【参考】久光公父子より毛利敬親公父子への書翰 慶應二年十月十五日 四〇八

一〇四 西郷吉之助への書翰 慶應二年九月八日 四〇九

一〇五 西郷吉之助への書翰 慶應二年九月廿三日 四一三

一〇六 伊地知壯之丞への書翰 慶應二年九月廿四日 四二二

一〇七 近衛内大臣への書翰 慶應二年十月 四二五

【参考】勝安房守より大久保への書翰 慶應二年十月二日 四三〇

一〇八 近衛内大臣への書翰 慶應二年十月六日 四三一

一〇九 井上石見への書翰 慶應二年十月七日 四三二

【参考】岩倉公より藤井井上兩人への書翰 慶應二年十二月十七日 四三三

一一〇 城連奥澤要人への書翰 慶應二年十月十六日 四三五

一一一 俸祿の一部返上を請ふ書 慶應二年十月 四三六

一二二 石原直左衛門への書翰 慶應二年十一月十二日 四三八

卷五

一一三 伊地知壯之丞への書翰 慶應二年十二月四日 四三九

一一四 公論採用に關する意見書 慶應二年 四四二

一一五 中根雪江への書翰 慶應三年正月十二日 四四五

一一六 岩倉公への書翰 慶應三年正月 四四六

【参考】其一 岩倉公より大久保への書翰 慶應三年三月廿九日 四四八

【参考】其二 岩倉公より井上石見への書翰 慶應二年十月十七日 四四九

一一七 小松帶刀への書翰 慶應三年正月廿九日 四五五

一一八 近衛忠熙公に呈せる意見書 慶應三年四月 四五六

一一九 新納立夫への書翰 慶應三年四月七日 四五八

一二〇 小松帶刀への書翰 慶應三年四月八日 四五九

一二一 西郷吉之助への書翰 慶應三年四月八日 四六六

一二二 久光公に呈せし意見書 慶應三年四月 四六八

目 次

一二三	立花參太夫への書翰	慶應三年六月十三日	四七二
一二四	菱田傳兵衛への書翰	慶應三年六月	四七五
	【参考】土藩との盟約書(利通手寫)	慶應三年六月十四日	四八〇
一二五	新納嘉藤二への書翰	慶應三年八月十日	四八五
一二六	藤井助市への書翰	慶應三年八月十九日	四八六
一二七	田尻務菱田傳兵衛への書翰	慶應三年九月十六日	四八八
一二八	田尻務菱田傳兵衛への書翰	慶應三年九月廿九日	四九五

大久保利通文書卷一



森山與兵衛あての證文 嘉永四年六月廿八日

(大久保家藏)

證文

金子拾四兩壹部印

兩ニ付七貫五百文替印

錢ニして百六貫八百七拾貳文印

壹ヶ年ニ金子五兩余宛本くつし

右之通此節無據入用ニ付致御借用之儀別條無御座候御返濟之儀ハ壹ヶ年ニ金子五兩余ツ、入付三ヶ年目元利無相違引結可致候依る爲後日證據人相立如斯御座候以上

嘉永四年辛亥六月廿八日

卷 壹 (嘉永四年六月)

證據人

皆 吉 金 六⑩

借 主

大久保正助⑩

森山與兵衛殿

【解説】利通ハ初メ正助ト稱シ後ニ至リ一藏ト改メタリ皆吉金六ハ利通ノ叔父ナリ

二 森山與兵衛への書翰 安政元年閏七月廿五日

(大久保家藏)

【按】此ノ書ハ借入金ノ返済ニ際シ添附セシモノナリ
殘暑未甚敷御坐候得共愈御堅勝奉賀候扱年々御返済金當月中御延引御願申上置候付是非五金丈御首尾合可申上含よて精々才覺致候處漸々二金丈相納近比赤面共何とも申上様も無之次第ニ奉存候何卒右丈御受取置被下殘金暫御延引被成下候儀相叶申ましくや平ニ御願申上候此旨乍大略以書

中御相談申上候尙拜眉委曲可奉申謝候已上

閏七月廿五日

森山與兵衛様

大久保正助

金子相添

【解説】大久保家ハ元多少ノ世祿アリテ生計ニ窮スルカ如キコトナカリシカ嘉永二年父利世カ君側ノ奸ヲ除カントスルノ議ニ與リ事露見シテ翌年遠島ニ處セラレ、ヤ利通モ亦職ヲ免セラレ謹慎ノ身トナル時ニ利通年二十一老母病ニ臥シ妹皆幼少爾來家道俄カニ衰へ一家ノ經營苦心慘憺タルモノアリ窮乏ノ餘屢親戚知已ニ金策ヲ乞フニ至リシナリ森山ハ棠園ト號シ後新藏ト改ム夙ニ勤王ノ志厚クシテ氣節アリ且資産家ナリシヲ以テ常ニ志士ノ急ヲ救ヒ事苟モ勤王ニ關シテハ進ンテ資金ヲ供給シテ殆ント家ヲ顧ミス利通父子亦親交アリキ續テ國事ニ

奔走シ文久二年五月西郷隆盛流謫ノ身トナリ共ニ歸藩ノ途次
憤慨ノ餘山川ニテ自及セリ又森山ハ安政年間江戸ニ於ケル藩
同志ノ義舉運動ニ就テハ少ナカラス其資金ヲ融通セリ當時薩
藩勤王志士ノ活躍ハ森山ノ義氣ニ負フトコロ實ニ大ナルモノ
アリシナリ

【参考】其一有村雄助等より大久保への書翰安政六年三月廿九日。(大久保家藏)

一筆啓上候彌以御壯榮大慶奉存候隨而私ニも至極元氣罷過候付乍憚
御放慮可被下候然ハ當地之形勢追々申越候通ニ此節も礫越萬々相
違無之と存候終ニ其期に至り候而も其許も勿論越、因、長、直ニ差立度
存慮之趣義御坐候就而も當分此内之取引旁ニも拜借金迎も難致一
同別而困窮之砌ニ御坐候得而外ニ才覺之手順も出來兼尤最早一日ニ
而も早目ニ手當致置時節与存候間銘々突出之用意無之而も殊ニ纒之
人數存分之事も出來申間敷存候付近頃御相談申上兼候儀ニ御坐候得

共六拾兩丈ヶ森山方ハ諸君被仰談御都合被成下間敷哉右等之譯ニテ
別段工夫も出來兼候處よて不得止御相談申上候間何分可然御取計被
下度偏ニ奉願候右用事迄如此御坐候以上

三月廿九日

有村雄助

樺山三圓

堀仲左衛門

大久保正助様

【参考】其二樺山三圓より大久保への書翰安政六年六月二日。(大久保家藏)

種々乍慮外御兩親様ハ可然様被仰上被下度宜敷御願申上候
御細書辱拜讀愈御盡力之段々深く御察申上候扱兩使之一條最早御安
心之筈と奉存候其節与而當地之形勢相變東濱益差迫り兎角事實相違
而も有之間鋪内實も保理(堀)子ハ被申越候付態与不能細書候付御計察可
被下候何分後便御待被下度申上度趣旨萬々御坐得共無益と存候儀

も有之餘事不申進候借金子之一條則御取計被下候由御多用之砌甚恐
入最早此事而已心配之處別々仕合之至御禮旁之儀之自然堀子よて被
申越候故別段不申上候付可然様御察可被下候右申上度如此ニ候恐々

樺山 拜

六月二日

大 久 保 君

二白各様の別段書狀差上不申上候付御取會之砌可然御傳聲被下度
乍憚奉合掌候

三 樺山三圓への書翰 安政元年十二月六日

(大久保利武藏)

【按】本書モ同シク金策ヲ懇請シタルモノナリ

樺山 三 圓様

大久保 正 助

尙々二金之内ニ亦も宜敷御坐候をてや御格護之程無覺束奉存候へ共
御願申上候

兩日と不奉得御意候へ共愈御清安奉賀候扱近頃自由之義申上兼候得共當
分金子御持合共被爲在候ハ、二兩丈御借用被仰付候儀相叶ましくや餘押
懸候儀御坐候へ共まハし之間無據入用御坐候付御願申上見候此分乍大略
以紙上如斯尙參拜可奉謝候以上

十二月六日

【解説】當時一家困窮ノ狀ヲ知ルヘシ樺山三圓名ハ資之利通ノ

義兄ニ當ル新納嘉藤次立ノ實弟ナリ利通及ヒ西郷隆盛等ト親

交アリ安政年間江戸ニ遊ヒ諸藩ノ志士ト交リ國事ニ奔走シ特

ニ長藩久坂玄瑞等ト親交アリキ

四 樺山三圓への書翰 安政三年四月三日

【按】曩ニ出府セシ樺山ニ京都ノ近況ヲ問ヒ御養子一件ノ眞否

ニ及ヒタルナリ

一筆啓上仕候愈以無御替最早御安爲ニ御堅固御勤被成珍重不過之奉存

候隨ち小弟家内中不相替罷過申候付乍憚御休慮可被成下候此節御通行如何之御都合有之候哉打續て天氣も宜敷時分柄ニ候爲決ち中途無滯御京着被成候半与奉存候其地光景如何之向ニ有之候哉此節飛脚迄ハ何も相變候儀も無之候由細狀も相見得候珍事も有之候ハ、何卒御洩被下度奉願候其上御暇も不被爲濟候由(不)氣おくれ候向ニ御座候爰許何も相變候儀も無之さしゝる事之承中々ノし不申候御遠察可被下候扱御出立之晩ハ段々与賑敷罷成是枝氏秘術も追々出申候面自計ニ御坐候深更迄罷居大祝ひいふし申候扱御出立前々風評有之候京都より御養子一件其許ニある如何之事とも候哉深く致信用かゝく御坐候得共專其通り申觸し何分實否御さくり右爲御知被下度奉願候此節と先以一左右迄あらゝく如此御坐候尙奉期後書候恐惶謹言

四月三日

大久保正助

樺山三圓様

追ふ乍紙端御宿許ハ無異被成御座候付少も御念遣被成ましく候兩親カ可然申上候様申付候間乍憚左様御納得可被下候

【解説】樺山ハ二月廿九日鹿兒島ヲ出發東上セシカ出發ノ晩送別ノ宴ヲ催シタルナリ書中ノのし不申ハ堪へ不申ノ方言是枝ハ歌人ニテ奇人ノ評アリシ幸左衛門生胤カ秘術トハ隠シ藝ノコトナリ又御養子一件ハ不明ナルモ齊彬公ノ世嗣虎壽君曩ニ天セラレシヲ以テ京都ヨリ(近衛家カ)養子ヲ迎ヘラル、風説傳ハリタルモノナラン

五 菊池源吾への書翰 安政五年十二月廿九日

(大久保家藏)

【按】西郷隆盛カ大島ニ潛居ヲ命セラレ渡航ノ途鹿兒島灣山川港ニ滯留中利通カ伊地知正治ニ托シテ贈リシモノナリ

此節兄御渡海ニ付而盟中之人心望を失候事不一方候得共何處位之定見無之候而も大事難成就殊ニ兄機先之遠慮云々拜聞致居ニ付而ハ不得已

時節を待不忍候も不相叶儀与致決定居候併御開帆後之處是非廟算盡シ置度愚考いふ候間遺策承度條々左之通ニ候間一々御答置被下度致御願候

一堀方肥藩之都合無他事決定之義一左右到來ニおひてハ合體之人數不願前後突出之事

一筑因長斷然之左右相分候ニおひてハ不及申事

一突出之節(燒損)之認様之事

右連名之處歟銘々遺書候歟途中差出候歟否之事

一發口も忌々敷事なりら算之第一ニ付難據申候譯合ハ萬一も堀に難事相掛候付而盟中之人心を憤激せるの一事此よおひて可忍ヤ否之事

一三藩に再度暴(燒損)相成スニおひてハ是非不願前後合體之人數可突出ヤ否之事

一此節護送之縛人極刑ニ處せらる恐多も堂上方不思議を懸奉るよお

ひて人心を動きの第三事此ニおひて合體之人數不願前後可突出ヤ否之事
一肥後長岡井ニ陽明家に賢慮を以添書之事
一諸藩御面接之有志談合(燒損)見當ニ相成ル可キ人名悉ク御記置可被下候事

右之外御(燒損)之事ハ成丈御記置被下度奉願候

午臘廿九日

利濟

百拜

菊池尊兄

追ふ私ニ(燒損)

一御滯島中御一身之愛護

天朝國家之爲造次顛沛無御忘暴飲暴食(燒損)之事

一餘リ異事ニ御過ニ被成間敷候事

一時々御考付次第心得ニ相成候ハ、御書通(以下焼損)

【解説】是ヨリ先井伊直弼大老ト爲ルヤ列藩ノ輿論ニ反シテ將軍ノ繼嗣ヲ紀州ヨリ迎ヘ又勅許ヲ得スシテ擅ニ條約ヲ締結シ加之天下ノ志士ヲ逮捕シテ大獄ヲ起シ薩藩モ亦齊彬公俄ニ薨去セラレシヲ以テ俗論黨勢力ヲ得形勢日ニ非ナルニ至ル是ニ於テ利通等ハ深ク時事ヲ慨シ藩ヲ脱シテ京都ニ出テ東西相應シテ事ヲ舉ケントシ先ツ同志ノ一人ナル伊地知貞馨ヲシテ諸藩ノ形勢ヲ視察セシムルニ決シコレニツキ豫メ西郷ノ意見ヲ求メタルナリ然ルニ西郷ハ此ノ書ニ答ヘテ先ツ天下ノ形勢ヲ詳ニシ諸藩ノ聯合ヲ計リ以テ同盟ノ根據ヲ堅固ニシ時機一度至ラハ斷然蹶起スヘキヲ以テセシカ後伊地知カ肥後藩ノ形勢非ナルヲ報スルニ及ヒ一時突出ヲ中止スルニ至レリ時處位ハ時ト場合ノ意筑因長ハ筑前因幡長門ノ三藩菊池ハ西郷ノ變姓

名ハ源吾ト稱セリ堀名ハ仲左衛門後伊地知貞馨ト改ム肥後長岡ハ監物陽明家ハ近衛家ヲ云フ利通時ニ二十九歳西郷三十二歳

【参考】菊池源吾より大久保への書翰安政六年正月二日

(大久保家藏)

大義之一舉ニ付御策問之趣幾度も承知仕候得共小生儀土中ノ死骨ニテ武運ニ拙ク大義を後ニいふし端島ニ身を逃候儀譬へハ破軍之降卒にて起テ御斷申上候儀ニ御坐候得共數からまも先君公之

朝廷御尊奉の御志親く奉承知如何ニもして

天朝之御爲めニ不可忍之儀も相忍道之絶えて候迄ハ可盡之愚存ニ御坐候間不顧汚顔拙考之儀も御返事申上候間必御親察被下御用捨奉希候

一堀々肥藩の決心一左右到來云々

按るに彌々決心候亦も越一往之返事不承届候て事を舉候儀ハ

決る仕間敷越と事を合て操出可申儀と相考申候夫而已から後筑因
長之一左右も必ず見合可申儀と奉存候就る事と事を擧の機會十分相
調候ハ、兼々格護の事急に御突出奉願候其節遲疑仕候儀ハ忠義之
人ニ非候併機會を不見合候て只々死を遂さへいふし候得と忠臣と
心得候儀甚以惡敷御坐候間是非御潜居被下候處奉合掌候
一堀若や幕手に相掛候節盟中之憤激云々

按るに盟中の人難に相掛候逆無謀の大難を引出候儀有志之可爲
儀ニ御坐候哉大小之辨別を不分事と相考申候依人成程残念之至ニ
御坐候得共堀も何爲ニ奔走仕候哉其心志を御取可被下死を決して
天朝の御爲ニ盡しニ非や左候得と其志を受候こそ盟中之盟する大
本と相考申候餘り理屈ケ間敷御坐候得共楠公の正行を歸するハ子
々孫々迄も

朝廷之御爲ニ忠義を遺しふる儀之大親切後世迄も仰慕所其節正行
も共ニ戰死仕候ハ、大孝子ニて御坐候哉遺訓を守て忠節を盡し候
所不論して明之能々御勤考可被下候千騎か一騎ニ成候迄も我黨之
忠節を盡候所肝要ニ奉存候必外事の不可移儀ニ御坐候
一三藩の暴命之云々

按るニ三藩の暴命を發候ハ、彌破を可申もふ此上と死を賜ふの
外ニ暴ハ有之間敷其節ハ必彼方も應援之儀可申遣候事速ニ候ハ
、其儀も間ニ合兼候半併盟中之儀と三藩と死生を共ニ仕度儀ニ御
坐候間如何ニとあらハ

先君公共ニ天下之大事ヲ被爲談

朝廷の御爲ニ盡さむらむ候御事ニ御坐候間同しく決心仕度儀と奉
存候三藩動立候ハ、共ニ動立可申儀と奉存候
一堂上方ニ恐多も難を奉掛候節云々
按るニ堂上方の手を掛け候ハ、定て勤

王之諸藩空見して罷在申間敷候間必は忽ニ動立不申諸藩と合體い
 んし候て是非共御難を可奉救儀肝要と奉存候憤激之餘りニ事を急
 き候てハ益御難を可奉重候間能々御盡可被下儀と奉存候
 一陽明殿に添書之儀一同之御評議も有之候儀にて若や吟味不届候て
 異議之儀共相成候も却る不宜儀ニ御坐候間伊地知の考付之趣得
 と相咄置候間御談合可被下候捨文之儀同斷申置候間左様御納得可
 被下候

一諸藩之有志見當ニ相成候人云々

水戸

武田修理

安島彌次郎

越前

橋本左内

中根勲負

肥後

長岡監物

長州

増田彈正

土浦

大久保要

尾張

田宮彌太郎

右之外御異見之趣等難有感服仕候必頓案被下間敷奉願候 頓首

正月二日夜認

源吾拜

正助様

六 樺山三圓への書翰 安政六年正月四日

(大久保利武藏)

【按】忠義公ノ世子哲丸君ノ夭折ヲ報シ又義舉ノコトヲ在江戸ノ樺山へ告ケタルモノナリ

尚々奈良原氏有村氏へ可然御傳置可被下候

若君様御事舊臘廿六日頃御不例被爲 入候處漸々被爲重終ニ一昨二日御養生不被爲叶被遊 御逝去何共絶言語候次第御互ニ愁傷此事ニ奉存候乍恐此御一人様をこそ奉頼居候處又々如此ニ御次第時節到來与可申歟御家運既ニ此ニ窮テ候儀与奉存候最早我黨外ニたのミ候事も無之相成申候實ニ去年來非常ニ御事而已打續キ又しも 此君さえ奉失最早暗夜与罷成候内實ハ初終年内御不快被爲在全躰御虚弱ニ別々一同奉懸念居候次第御坐候處廿五六日頃御吐乳被遊御熱氣も被爲在御乳も御引キ被遊兼漸々御氣脱ニ自然ニ御隠被遊候由御病症ハ萬驚風ニ被爲入候由御坐候 一堀子去ル十二月十九日被致出立肥筑因長立寄ニ賦ニ御座候左候其

地着之筋御坐候付其上爰許形行御承知可被下候堀子ハ一左右次第一同決心ニ評定相窮居候付左様御承知可被下候如此時宜成立申候處愈以此一左右一日三秋ニ思ニ御座候右四ヶ所ノ内とふそ相應候處萬々相願居申候何分堀子其許着之處ハ少々隙取候半と被相考候

右今日急キニ差立候付於詰所漸々あるら相認御悔迄申上候委細ハ何分難相認近々有村雄助出立ニ筈御坐候付不遠着之上直々御承知可被下候恐惶謹言

正月四日

大久保 正 助

樺山 三 圓様

江戸(封筒)

樺山 三 圓様

大久保 正 助

【解説】先君齊彬公ニハ屢男子出生セシモ皆夭セラレシヲ以テ當時志士等ハ反對黨ノ所爲トナシ大ニコレヲ憤慨セリ哲丸君

ハ實ニ公ノ六男ニシテ公ノ薨去後忠義公ノ嗣ト爲リ志士等カ最モ望ミヲ屬セシ方ナリシカ途ニ又夭折セラレシヲ以テ利通等ノ悲歎モ亦一層深カリシナリ且前年十二月堀仲左衛門鹿兒島發途肥後筑前因幡長門ノ四藩ヲ訪ヒ同志ノ突出決擧ニ應シテ奮起センコトヲ勸誘シテ後東上ノコト及ヒ四藩ノ應否一報ヲ待チ直チニ同志ノ進退ヲ決センコトヲ報シタルモノナリ

七 堀仲左衛門有村雄助への書翰

安政六年九月四日

【按】在江戸ノ兩氏ヨリノ來翰ニ答ヘタルモノナリ

去月六日御仕出之書翰一昨二日相達し拜見致候處先つゝ御傷みなく奉大慶候此許盟中御同然中々元氣罷在候間御休意可被下候この節之御左右奇妙ニ目を覺まし水戸人事を盡して天運ニ任まとのこと誠ニ以て奇妙之如最も諸方手廻し届き候由次第旁感服この事ニ御坐候日期相定り候ハ、御沙汰相達候上ハ盟中直ニ突出致し

順聖公御趣意を奉繼

天朝を奉守事皆々一日を待兼候儀ニ御坐候何れの筋井伊間部か首を御地よて宜敷奉願候最早一々御返答ニ不及この後尙又御計策奉願候敬白

未九月四日

大久保正助

有村俊齋

堀 仲左衛門様

有村 雄 助様

【解説】此書ニ依レハ利通等ハ當時内外ノ時事日々非ナルヲ憂ヘ藩廳ノ因循成ス無キヲ慨シ窃カニ藩ヲ脱シテ事ヲ擧ケンコトヲ畫策スル所アリ同志江戸ニ在ツテ水戸藩士ト結ヒ先ツ違勅ノ閣老ヲ除カンコトヲ謀リ蹶起シテ突出ヲ決行シ 天朝ヲ守護スルノ議ヲ定メ東西相通セシヲ見ルヘシ此際江戸ニ在リシ同志ハ堀有村ノ兩氏ヲ始メ有村治左衛門・高崎猪太郎・田中直

之進・山口三齋・益山東碩等ナリ而シテ井伊大老ハ翌年三月三日
江戸櫻田ニ於テ有村治左衛門及ヒ水戸藩士ノ爲メ襲殺セラレ
タリ間部ハ下總守詮勝幕府老中ナリ

【参考】有村雄助等より大久保への書翰 安政六年八月廿三日

(大久保家藏)

尙々岩元六氏明日發足幸便と存即御報申上候少々差扣義有之態
与岩元の此節一義何も相明し不申候間左様御含可被下候樺山
三殿長物御宰領杯有之御發足御座候以上

益山氏の御托之七月十八日之芳牘今朝拜讀御同腹中先ハ御無事之段
奉賀候水府義舉遲滯ニ付御安堵無之段と御尤至極ニ御座候併議論致
異變候義ニ全無之内實と要路ニ苟且之論相生上下一同決舉之義六ヶ
敷高橋其外有志之人々死力ヲ盡シ改籌策老僕共密ニ相通シ其手ヲ以
破所と決し候彼藩人内も高橋ハ國ヲ捨て天下ヲ謀リ國賊ニ當候故暗
殺いハ杯と申者も有之苦心之事共不被申限リ御座候由先日ハ懇々

高崎ニ托し小金ニ屯し候齋藤監物二百人計引連ハ參り致議論候處我幕
下ハ已來如何様之事候共此地不致退散高橋杯籌策之上指圖ヲ相待候
義ニ亦萬カ萬一舉ハ無疑此義ハ致安心居候様申事ニ御座候去ル十六
日礮を致出會吳候様申來リ有村高崎山口小生四人於墨水大七樓高橋
金子野村弓削大湖關炭谷の取會致密議候一國決舉之事ニ候ハ、易制
勢ニ候得共有志中之手初故措置之次第一入苦心ニ亦大舉當日の跡五
六日之所極々大事之場合故右等之手順尤入念致都合候由先便ニ亦天
下有志之人々の大義一舉之趣意相通密ニ公卿方の申上置書付も精書
ニ相成致熟覽候高野山にも又々十人位引詰之爲人ヲ差立候由五人ツ
、組合四十五人程當地處々に爲潛置候由是も一策有之事之由仙臺も
不遠内大勢引連レ御出府之向高橋列を得と致歎願談合有之事をハ
大七樓出會之折高橋を小生ヲ別座に引極々機密ニ秘議も相洩し籌策
も既ニ將相成之勢ニ候間少々遅々罷成様候得共義舉一發之所ハ萬々

無相違事と存候間來諭之御策も御尤之義ニ候得共暫時御扣置御潜居被下度少々申過候様ニ候得共四十七士一舉も僅ニ二千石位之麾下ヲ兩年ヲ經事ヲ舉候譯ニ此節之義ハ開闢已來之大難輕重大小差別有之敵之頭ヲ落し候迄不_レ相濟況夷狄目下ニ充滿決着之措置第一之事ニ_レ礫遲引候様子候得共旁御推察被下度因循之間機ヲ失候憂ハ至極御同論ニ_レ事不相發内ニ露洩之憂尤切ニ御座候右等ニ每度出會之節ニ例ヲ舉正不正之違イハ有之候得共由井大鹽一舉之期前ニ致露洩般鑑不遠能々御思慮一日も早一發之御都合有之度申入事ニ御座候尤礫申ニも此ノ勢ニ迫リ十全之策_ニ迎_ル不_レ相調_ル故人事ヲ力一杯ニ盡し運ヲ天ニ相待_ルも申事ニ御座候萬々一礫議論相變し失機之向ニ成立候ハ、御論通苟且安然罷在候義ハ志士之可恥義ニ_レ御座候間必死ニ越土長因_レ牒合即田直氏急速差上小生_ニ一舉之次第内々達叡慮候様取計御中途迄相迎居候様可致候間一先此策_ニ御扣置可被下

奉頼候何分日期相定候ハ、無手拔田中氏早々可差上候大云々之義ハ委細致承知候有村俊君_ハ御狀參リ御返詞申上候間早相達候半先ハ貴答要用迄勿々如此御座候謹言

未八月廿三日認

有村 雄 助

堀 仲左衛門

(花押)

岩下佐次右衛門様
 大久保 正 助様
 有 馬 新 七様
 いち、龍右衛門様
 吉井仁左衛門様
 税所喜三左衛門様
 有 村 俊 齋様

八 藩主への上申書 安政六年九月

(大久保家藏)

【按】本書ハ利通カ同志四十餘人ト脱藩義舉ヲ決行セントセシ
際藩主ニ上ル爲メニ起草セシモノナリ

私共事今般奉犯御大禁爲可奉救

天朝之御危急一同不待國命今晚

王地へ志シ發足仕候實ニ不敬之罪不堪恐懼候得共全後(燒損)國家倒行逆施
之舉動毫髮無之候間別紙之通奉告政府候乍然委細曲折ヲ記シ候得去段々
忌諱(燒損)候間概略之主意ヲ相記候迄ニ御坐候抑及此舉候儀一朝一夕之根
據ニ無之來歴至密之譯ヨリ相讓候次第ニ亦偏ニ御國家之御大事ニ相拘候
危急存亡之御時節ニ可有之奉存候間此主意且始終之微細奉告度左條言上
仕候

卑賤之私共國家重大之機事奉申上重疊非公之罪恐入候得共累代奉浴 高
恩候臣子之情義難默止素志ニ亦他念無御坐候間如何様被處重刑候共一同

奉甘心候伏請私共一同爲 國家不奉(燒損)候一筋 御取用被爲在

順照院様御遺志御相續被遊候御趣意第一近年外寇相侵終彼等意中(燒損)

開闢以來未曾有之御瑕瑾被爲受ニ至リ偏ニ被惱

叡慮御儀ニ候得共幕役姦威ヲ逞し奉背(燒損)之處置ヲ以自儘之取計イタシ

此ニ至勤

王水府老公ハ勿論 順照院様奉初越前侯尾張侯其外御結合相成是非外夷

攘除

御趣意相立就亦去何レ外ヲ禦ニハ内ヲ治ニ如カス内ヲ治ニハ國策相定是
非仁心仁聞ある御方西丸ニ被爲立改革ヲ成シ風俗一新十分内ヲ堅シ候亦
外夷ニ及レ彼ヲ屈伏セシムルノ遠畧ニ亦兎角當時才德有名人望(燒損)年輩
彼是其任ニ堪候一橋侯西丸ニ御立被遊度

御趣意ニ亦既ニ去春堀田備中守上京之節一橋公西上之義(燒損)候乍然英明
之御方様ニ亦姦賊等我意ヲ振ひ政權ヲ專ニする不相叶候間 幼君ヲ押

立候様及姦計候由且外夷假條約御處置之(燒損)之候處被爲對(燒損)及如何ニ付深被惱

叡慮候不去人心之居合國家之重事ニ付三家已下諸大名被召度旨云々被下(燒損)水戸中納言殿初松平大膳大夫松平相模守松平土佐守等諸侯伯被牒合被遂 奏聞奉戴井伊掃部頭間部下總守水野土佐守等被及 追討候江戸表盟中堀仲左衛門は水戸より引合有之當時(燒損)之折柄ニ不此舉ニ付不去(燒損)大事ト云フ譯ニ不彼方は比叡山結合相成其外四方響應之賦ニ不候得共急變之處專我人數ヲ京師陽明殿ヨリモ一向御委任之趣等ヲ以今曉同志急ヲ告來候則形行言上可從 國命義當然之譯御座候得共乍恐 順照院様御在世中御深慮被爲在之御譯モ有之候不水藩其外有志之侯伯は被結置(燒損)居 御逝去後ニ至右之續合ヲ以江戸表同志中(燒損)終ニ及此舉候譯御坐候間至此候不一日も早(燒損)候義第一肝要之義ニ不兼不姦賊之餘黨ヲ以 王地は備置候譯ニ候得不一日之後ヲ以如何様之(燒損)被及候

も難奉圖第一御家之瑕瑾与可相成譯合御坐候間聊御遺志之寸毫奉相繼爲(燒損)萬分ノ一ヲ奉補度前後ノ思慮ニ不暇突出仕候一同之赤心

不被爲汚 御德名明大體正名義

天朝之藩屏ニ被建置候 國家タル御職掌被爲思召萬世不朽之基御開キ公然明白御處置ヲ以後世之龜鑑与可相成様御裁斷被爲在度一同奉懇願候

【解説】薩藩ニ於テハ曩ニ齊彬公ノ薨スルヤ城代家老島津久寶家老新納久仰等専ラ政權ヲ握リ公ノ施設セシ政策ヲ覆ヘシ只管幕府ノ意ヲ迎フルコトニ汲々タル有様ナリシヲ以テ利通等ハ深ク之ヲ慨シ先君ノ遺志ヲ繼承シ朝廷ノ爲メニ大ニ爲ス所アラント機會ヲ待チシカ會々井伊大老カ勤王ノ諸侯ヲ罰シ志士ヲ斬ニ處スルノ報ニ接スルニ及ヒ遂ニ同志四十餘人ト結盟シ斷然藩ヲ脱シテ京師ニ出テ義兵ヲ舉ケントスルニ至リシナ

リ書中「別紙之通奉告政府候」云々トアルハ別ニ藩廳ニモ提出セ
ントシテ起草セシモノニテ其書ハ次ニ在リ此書ニヨレハ當時
利通等ノ精神ハ一途ニ先君ノ遺志ヲ繼紹シ朝廷ノ爲メニ身命
ヲ塔シテ大事ヲ決行セントセシモノナルヲ知ルヘシ本書ハ所
々欠文アリ且ツ本文ノミ傳ハルヲ以テ何時頃起草セシモノナ
ルカ明確ナラサルモ九月同志ノ一人タリシ吉井友實當時仁左衛門ト稱ス
カ其父ニ宛テタル書中ニ「御家老座え向け一封差出置申候」云々
トアルヲ以テ見レハ九月頃起草セシモノナランカ

【参考】吉井仁左衛門より父への書翰 安政六年九月

(吉井家藏)

私事今度士臣の分を不盡候不叶儀有之御暇乞をも不申上京師に出
張仕申候生きては再可歸儀に無御座候間御杯共頂戴仕趣意をも得と
申上出足仕筈御座候得共同盟四拾餘人堅申合候儀御座候間不本意千
萬御座候共態と不奉告爲御知申上候は、却る御喜ひ御勸め可被下奉

存候得共何分前文通申合候儀御座候故無是非次第御座候尤も趣意之
儀者御家老座え向け一封差出置申候間自ら追々御聞及可有之奉存候
只此節に至り難忍者御老身之御行末如何と是而已氣懸り御座候得共
古より大義之爲に父母妻子をも不顧身命を捨候儀士たる者之職分に
不素より甘心可仕儀に御座候間何卒宜御推計被下候折角無御障御
渡り被下度奉合掌候妻子之儀者別段可申上置所存も無御座候間平次
郎様藤左衛門様杯被仰談何分宜御願申上候
母上様御遺言之旨も被爲在候間御一生者成丈御不自由無之様不仕候
不叶儀と兼々承用意致居申候間少者安心仕居申事に御座候私儀之
天朝之御爲且御國家之御爲順聖公之御遺志に随ひ随分働申候間戰死
仕可申誠以武士之冥加無此上色々申上度儀山海御座候得共只至要之
事迄申上置度如此御座候恐惶謹言

九月

吉井仁左衛門

父 上 様

【参考】薩藩同志者姓名錄 安政六年

(有村家藏)

大島渡海

菊 池 源 吾(西郷隆盛)

在 藩

堀 仲左衛門(伊地知貞鑿)

岩下佐次右衛門(後子爵方平)

大久保 正助(利 通)

有 村 俊 齋(後子爵海江田信義)

有 馬 新 七

吉井仁左衛門(後伯爵友實)

奈良原喜左衛門

伊地知龍右衛門(後伯爵正治)

鈴木勇右衛門

稅所喜三左衛門(後子爵篤)

樺 山 三 圓

中 原 猶 助

山 口 金之進

本田彌右衛門(後男爵親雄)

高 橋 新 八

森 山 棠 園

森山新五左衛門

江夏仲左衛門

奈良原喜八郎(後男爵繁)

永 山 萬 齋

野津七左衛門(後陸軍中將鎮雄)

道島五郎兵衛

大 山 彦 助

坂本喜右衛門

大山角右衛門(後綱良)

野 本 林 八

山之内 一 郎

有 村 如 水(後國彦)

野 津 七 次(後侯爵道貫)

高橋清右衛門

中 原 喜 十 郎

鈴木源右衛門

鈴 木 昌 之 助

西 郷 龍 庵(後侯爵從道)

在 江 戶

有 村 雄 助

有村次左衛門

山 口 三 齋

田 中 直之進(後謙助)

高 崎 猪太郎(後男爵五六)

益 山 東 碩

旅行

仁禮源之丞(後子爵景範)

平山龍雪

鶴木孫兵衛

赤塚源六(眞成)

在伊集院

坂本六郎

坂木藤十郎

京都詰

徳田嘉兵衛

九 藩主への上申書 安政六年十一月

(大久保家藏)

【按】本書ハ藩主ヨリ利通等同志ニ親諭書ヲ賜ハリシニ對シ請書ニ添ヘテ上リシモノテ海陸ノ軍備ヲ整ヘ水尾越其他諸藩ト聯合シテ勤王ノ大志ヲ貫徹スルコト及ヒ西郷隆盛召還ノコト等ヲ建言シタルモノニシテ利通ノ起草ニ係ル

御内諭之御趣以 御書取被仰下別紙之通御請書血判差上

上書相添連名奉嘆願候同八日谷村ヨリ入 御覽即日左衛門殿 出候
別ニ難有不堪恐懼候
謹ニ奉言上候

以御書取不容易御内諭之御趣奉謹承候上卑賤之私共
御國家之機密ニ相係候事件押ニ奉建言候儀且亦何共恐懼至極奉存候得共
實以 國家之御大難 御家之御大事且夕之危急ト相迫候時節空手傍觀罷
在候ニ云累年奉浴恩澤候臣子之情義難相濟不奉願萬死之重罪奉至願候趣
意左條々言上仕候間不被爲叶
思召候ハ、假令被處極刑候共固よ可奉甘心候
動搖之世態被爲 知食
順照院様御遺志深ク御奉戴以 御國家 御奉護可被抽御精忠云々之次第
實以不容易御儀
皇室再興之御機微幾重ニも難有奉恐入不奉堪飛揚候就ニ奉恐入候得共

(燒損)待時候得々策内ニ決不虞之御急備 御一定不被爲居置候而々不相濟
御義与奉存候既ニ於關東表水府始仙臺長州因州土州其外勤王諸藩四方合
牒姦賊進討之義舉愈相迫候已上普々四方有志之藩ハ布告し十月中を期と
せざる儀ニ而京師ハ密使差立候時宜ニ及居候得々禍亂面前ニ赫然せる義ニ
而不遠變ヲ告候義及案中御坐候
朝廷之御危急ハ勿論 御家之御大難奉陳迄モ無御坐候然々兼而御手當被
爲在度奉願候 御軍備御手當向之義兼而御治定被居置被備不虞有之度儀
与奉存候得共此節之義別而 御國家之御大事御坐候間急卒之間ニ逢之御
處置被爲在候様ニ而々難被爲濟御儀尤器械之御用意等々抑枝葉之事御坐
候於是御急務之義者第一人心之向背如何之儀御坐候間人望依頼之人躰執
政被居置候様有御坐度島津左衛門殿被堪其任候人躰御坐候間早々御再職
被 仰出御手當向嚴重被備置度候様奉願候右様危急之時節御猶豫被爲在
候而々千載之御瑕瑾と可相成奉存候間早速御英斷被爲在候様奉至願候人

數御差出ニ付而々 主將之任至重之御譯御坐候間被爲請 御意候御方ニ
不被爲在候而々相濟申間鋪候申上候義奉恐入候得共當時重立候御方(燒損)
不被及御撰舉候共島津圖書殿御器量人望御相當之御儀与奉存候間被命
御名代度尤決舉之注進不出當日(燒損)ニ不相成候様御治定專要奉願候亦右
之趣謹而奉言上候間急速御英斷被爲在候様奉願候乍恐
順照院様御在世中菊池源吾義被明 御腹心奉(燒損)水戸越前尾張其外御結
合之義共凡而御委任被遊 京師と勿論關東諸所奔走周旋仕第一一橋公西
上一條之義盡力之折柄事情不奉言上候而々不相叶譯合有之昨年七月罷下
候處別而被遊
御満足始終之曲折達

御聽候時分幕威盛ニて西上一條之義何分難致成就勢被遊御承知 御沙汰
之趣ニ々萬一モ姦策ニ陷紀州ハ西上之義相決候得々天下之禍亂ト相成候
々顯然せる事候(燒損)被遊御出馬

天朝 御奉護可被爲在左候得_レ九州_ニ盡ク我_ニ屬候_ニ案中_ニ候間
御發駕_之義モ九月朔日_ニ御日限被定置候得共彼表依模様_ニ 御出府不被
爲遊 思召_ニ付早々致出府形行可申上越段も被爲在御意候由實以希有_之
御英斷難有不奉堪感服候右様勤
王_之御忠誠確乎_キる御儀御坐候間自然御感應被爲在候半鎌田出雲殿去八
月滯伏_之節 近衛殿ヨリ偏_ニ 御國ヲ 御頼思召候
叡慮_之趣被奉承知 御請書迄被差上候時宜_ニ 殊_ニ
薩摩守_ニ相果候由跡_之義差支無_之哉_ニ
御沙汰迄被爲在候義親敷 近衛殿ヨリ月照和尚御直_ニ奉承知候段實_ニ股
肱柱石共被爲_レ誠以不奉堪感激悲痛次第御坐候_レ御頼被爲 思召候
御儀御坐候得_ニ是非諸藩_ニ不被爲後
勅意御奉戴不被爲在候_ニ被爲濟間舖候間奉願候趣意早ク御取用相成
皇室御興復_之

御大志御卓立被爲在度實以天下萬世_ニ亘リ名分大義所關係候得_ニ非常_之
以

御英斷公然明白御措置被遊
順照院様 御遺志千載_ニ相輝候様有御坐度奉存候然_レ
太守様御繼述_之御忠誠永世相貫古今未曾有_之御功業可被爲遂大機會ト奉
存私共一同不奉恐僭踰_之罪以必死奉歎願候

【解説】利通等カ脱藩義舉ヲ企ツルヤ當時藩侯_ニ近侍セシ谷村

昌武_{時ニ}助_{ト稱ス}ハ大_ニ之ヲ憂ヒ密_ニ利通等ノ計畫ヲ忠義_ニ告ケ

未然_ニ此舉ヲ中止セシメラレ_レコトヲ以テス公ハ乃チ久光公

ニ謀リテ親諭直書ヲ利通等_ニ賜フ其書_ニ曰ク

方今世上一統動搖不容易時節にて萬一時變到來の節_ニ順聖
院様御深意を貫き以國家可抽忠勤心得に候各有志の面々深
く相心得國家の柱石に相立我等の不肖を輔不汚國名誠忠を

盡吳候様偏に頼存候仍て如件

安政六年己未十一月五日

茂 久花押

精忠士面々へ

抑モ君臣ノ情誼深厚ナル想像モ及ハサル當時ニ於テ此ノ如キ
 懇篤ナル親書ヲ賜ヒシ上ハ利通等如何テ其恩遇ニ感激セサラ
 シヤ是ニ於テ遂ニ脱藩ノ舉ヲ止メ連名ノ血判ヲ以テ請書ヲ上
 リタルナリ而シテコレニ起因シテ利通等ハ漸次久光忠義兩公
 ニ認識セラレ遂ニ藩ノ重職ニ任シ機務ニ參與シ爾來兩公ヲ輔
 佐シテ國事ニ執掌シ遂ニ彼ノ維新ノ大業ヲ成就スルニ至リタ
 ルナリ血判ノ請書ハ佚シテ今傳ハラス而シテ本書ニヨレハ建
 言ノ第一即チ島津左衛門久徴置領主日登庸ノコトハ直ニ採用セラ
 即日家老ニ再任セラレタリ書中島津圖書ハ忠義公ノ弟久治ナ
 リ

【参考】久光公より大久保への書翰 安政六年十一月六日

(有村家藏)

再三ニ封書委曲其意を得候實以て一天下ニ大事ト深ク心痛いさし候
 先度も吉祥院へも申合候通何分元氣論和議論有之密路相開き難く
 殘情不尠候先寄り候得て隨分面談出來候とゞ相考へ候先ハ微意申
 述へ此くの如く候以上

十一月六日

尙別紙早速相遣てま筈ニ處多事取紛を延引致候以來不相變存慮可
 承候東部之一左右も御知らせ可有之候

一〇 藩主への上書 安政六年十一月十九日

(大久保家藏)

【按】海江田信義ト共ニ御劍獻納ノコトニツキ建言スル所アラ
 ントシ拜謁ヲ乞ヒタルナリ

謹み奉言上候

金剛定院様

卷 壹 (安政六年十一月)

四十一

御在世中自

(燒損)御劔打方之儀被爲

蒙 勅命則波平へ被 仰付成就之上御腰物方役人野村助七宰領被 仰付
上 京仕居候處今般 御逝去ニ付早々

御劔宰領ニ罷下候様豊後殿以一名問合相達別之不都合ニ罷下候右
ニ付之被爲對(燒損)違勅之被爲請

御名目(燒損)之御逆鱗勿論

近衛殿ニも別之 御立腹被爲在候由甚以 御國家 御一大事ニ千載之
御瑕瑾与可相成機微之御時節實ニ不奉堪痛心次第御坐候仍之 御處置之
儀奉建白度愚存之趣御坐候得共名分大義之(燒損)且亦大臣黜陟ノ譯ニ候得
之至重至密之儀ニ始終之詳悉書面ニ難相記自先度再三御目通之儀奉
願難有

御内諭之御趣迄奉謹承候上(燒損)奉願候儀奉恐入候得共如何様共御密路御

開被下

御目通被仰付被下候様奉歎願候彼是御嫌疑之御譯之可被爲 在奉存候得
共此内時勢ト夫一變之(燒損)間格別被爲觸忌諱候御譯も有御座間敷奉存候
付乍恐兩日中御都合被成下候様伏之奉願候幾重ニ及
御國家 御大事ニ相懸候事件(燒損)上僭踰之重罪不免極刑候得共兎角臣子
之至情難默止不奉願萬死亦々言上仕候恐惶敬白

十一月十九日

大久保 正 助

有 村 俊 齋

上

【解説】是ヨリ先齊興公御劔獻納ノ勅命ヲ蒙リ野村助七ヲシテ
御劔ヲ携へ上京セシム既ニシテ公薨去セラレシヲ以テ城代家
老島津久寶等ハ幕府ノ嫌疑ヲ受ケンコトヲ恐レ野村ニ命シテ
御劔獻上ヲ止メ歸藩セシム利通等之ヲ聞キ大ニ憤慨シ乃チ藩

候ニ拜謁シテ獻納中止ノ不可ヲ建言シタルナリ書中「金剛定院」ハ齊興公ノ法號ナリ(利通日記參照)

一一 菊池源吾への書翰 安政六年十二月

【按】大島蟄居中ノ西郷隆盛ニ藩主親書ヲ發シ同志突出ヲ中止セシ事ヲ報シタルナリ

一先月五日自

太守様以 御直筆 御内諭之御趣奉拜承其次第ハ當時世 御嘆慨被爲在昨年来貴兄一條ヲ初其后同志突出之事實被聞召通候御譯有之谷村ヨリ大〇被相下候御書取之趣方今時世不穩萬一時變到來之節者 順聖院様 御趣意奉繼以 御國家
天朝御奉護可被抽精忠 思召ニ付各 國家之柱石ト成テ 我等之不肖ヲ輔可吳候様御頼 思召之御旨云々 御實名御花押相居精忠士面々中
は与之御宛ニ御座候仍亦一同難有拜承連名血判ヲ以御請書差上候時宜

ニ御座候 及此舉候義舉竟貴兄之御趣意ヲ以私共一同決心仕候義故其段相演御連名仕候 先是豊州義多年之勤勞ヲ被賞
御城代一扁被 仰付候

一同九日總州御再職被 仰付候 御軍役方御勝手方鑄製方御改革御内用方琉球産物琉球掛犬物方御製藥方凡被掛置候
豊攘除總公撰舉ニ付亦去駿堅武之輩妨之偏ニ 防公之御英斷ニ出候由
駿此日ヨリ稱虛病退職之心底之候由堅當分温泉ニ亦是以同様之心組ニ
候半併是ハ御攘除之筋ニ決居候由其後表傳歸役三藤御側御用人出テ大
四ヲ被復候山喜 社方福直方御勤定ヲ被退候玉里掛御小納戸以上御側役取次
御納戸奉行御茶道ニ至迄願通御免被 仰付候 老公御逝去後掠官物雇人夫私邸へ運送爭奪之振舞不可言實
以極罪ニ可被處儀ニ候得共御逝去無間事故御仁宥之御處置ト被窺候

一以上之事件ハ先便ヨリ申上越置候間態々不及詳悉候其后之次第格別變態も無之候得共日々盛大ニ歸向スル之勢ニ御座候山莊儀先月末再役急出府被 仰付則致出立候 是儀豐賊等退職后屢催密會幕之意通之恐有之御臺一姦標に御結其餘奸路閉塞之爲云々之御秘計ト被窺候
之奸謀之勿論幕之暴威別亦御嫌疑被爲憚十分之御處置被遊兼形ニ被窺

候夫故御軍と勿論勤 王之御大志御卓立三藩等御結合之儀且貴兄被召返候一條急々御英斷ニ被出來兼候向ニ御座候折柄

京師 御献上 御劍一條致到來候間 此義被蒙 勅命 老公御在世中 御奉戴 被爲在則波平の打方被 仰付成熟之上野

村助七才領ニ多上京之處滯京ニ多拵方被 仰付折角致都合既ニ成就ニふらんとする時 豐賊ヨリ問合到來 老公御逝去ニ付斷申上候様自 太守様拵方成就之上御 献上可相

成譯候得共是以不相成候ニ付早々 御劍致才領罷下候様申來形行陽明家へ原田方及披 露候處別之御不都合ニ多違 勅之 御名目迄被爲蒙候時宜ニ多散々之首尾ニ多野村

罷下 實ニ御國 家御一大事不可忍之極罪ニ候間形行篤与野村に承候上

及建白候趣ニ去如斯 勅命被爲蒙候義於 御家前代未聞之御盛事千載

之 御名譽ニ候處一奸之所爲ヲ以 御三代様奉汚 御名目殊ニ自太守

様

勤王之御志云々御内諭之御趣被 仰出候ニ付去夫形被召置候去夫人

心一同不忍默視尤以來如何様 御嚴令被爲下候共被相行候譯合無之候

間名分上之御處置ヲ以テ極罪相當ノ 御刑罰被召加則御人撰ヲ以テ不

日上 京御斷之上再度 御拵方 御願御献上相成度人体之儀幸伊集院

交代松元十兵衛に被 仰付候間岩下佐士儀他所向ニモ取馴居學力モ有

之名義辨別之者ニ其任ニ堪候間是非繰替被 仰付度假令此舉無之候

共當時非常之時節御留守居之義有志之者御撰不被居置候亦不被爲濟義

ニ亦無上之機會故是非御裁斷被爲在度云々奉嘆願候 君公にハ谷村に

直談ヲ遂上書 防公にハ吉祥院ヲ以建白總州にハ表田に熟談之上趣意

相達候手策相廻シ候得共何分前件御嫌疑之病根ヲ以テ 御英斷不相調

候畢竟表田之趣意果決之御處置ニ亦ハ事不成候間漸ヲ以御國事治定相

成當時先々外事ニ不及手ヲ沈靜寡默變ヲ待候与之說ヲ持重致シ候總州

御趣意モ專表氏之說ニ出テ候間愈以我黨之素志難達候 防公御眞意去

隨分御英斷出來居リ候得共隱然 御後見之思召ニテ柄權ヲ御避萬事

君意ニ出テ候様ニ与之御忠膽ニテ御心決ノ義も御遠慮被爲 在候事件

モ有之 君側正邪進退之義等斷然御施之思召候得共考通不參与之御意モ有之由町谷愛 田等不斷等之義御明察且總州モ我カ意ヲ能得ラレト之御意モ有之候由

岸良 御附相 義赤心片々是非

先君御遺志奉繼事業興復ヲ自任シ報國之志操不可奪君側文武廢弛之義ヲ興起シ其餘燼弊之事件多
ノ力ニ出テ候防總之間ニ周旋シ御真意窺得大ニ道ヲ開キ候兒雄義附相成候
既往ヲ悔當分兩士ニ合腑一向同腹鈴喜木藤杯其風ニ附候由

一京師關東之形勢別紙堀士書狀德田文面之通ニ御座候間御覽可被下候堀
士別亦危急之義ニ付私出府之儀取與シ候何分前條通先々手ヲ延キ候御
趣意被相行候間事ヲ成ス之趣向ニ不ス御裁斷六ヶ敷候間堀士萬一難
ニ係リ候得夫外同志中兎亦モ不致傍觀若哉左様之時宜ニ及候亦夫御國
家御難題無相違候間不日出府被仰付候ハ、御當地之形行君意之處
且防公總州之御趣意云々相通シ度畢竟御國元事情委曲不相違候故
急迫之決心イタシ候譯ニ候得夫何分大事之一條書面ニ不モ難申越仍亦
出府之上篤与申諭何處迄モ御趣意相貫御請書差上候詮相立度ト之素
志ヲ以防公總州ハ奉嘆願候防公ハ岸彦總州ハ谷愛ヨリ篤与事情建
白菖田氏ハ直談十分可成之機會相成候處都合
惡敷當日防公御登城無之總州表氏ノ評議ニ亦一先堀士御下シ當日町

飛脚被差立御問合相成候事情御聞取秘成度与之事ニ相決シ翌日防公
御登城議定之段御相談ニ亦其通御同意相成候由其翌日表氏ヨリ口合度
譯有之參候様申來差越候處御内諭之趣ニ夫何分御國家御大事之義ニ亦
急卒御裁斷被遊兼候付一先堀士御召下シ事情御聞取之上御處置可被爲
在与之御吟味ニ亦内分御達シ申候様ニ与之事候段致承知候事ニ御座候
然處兒玉雄ヨリモ防公御意ヲ得能々密
路開キ居候間相托候其前日篤与事情申含防公ハ猶亦
上達之處趣意無殘處申盡シ吳且堀義萬一モ御下シ相成候得夫危急ヲ見
捨罷下候考ニ無之不得止亡命致シ是非隱然事ヲ謀度平日之決心ニ御座
候段申上候處防公モ至極御驚駭左様之譯有之候ハ、何ソ早ク知ラセ
ス候哉總州ヨリケ様々議定之段承知尤ニ存候故風与致同意候左様之
義存知候得夫決亦此ニ及ス事ニ候且大久保義致出府事情相達シ候亦モ
同志承服不致候ハ、同氣相成事ヲ起シ候者ニ亦モ無之哉如何存候ヤト
之御事ニ亦其義ニ付亦夫篤与彼カ心術承候處云々心決之次第モ有之其

處ニ於ルハ寸毫無疑尤何ニモセヨ於是夫御登セ不相成候而夫難被爲濟
 若江府之有志暴卒之事ヲ起シ候へハ何レ御國家之御大事ニ相成得夫御
 處置ヲ不被加而不相成御所置有之候得夫義氣ヲ御挫キ候譯ニ相當レ此
 衰世ニ當レ義氣ヲ御挫キ候而可被爲濟被思召候哉与難シ候處決而左様
 ニ而夫不相濟候何分此義ニ付而夫明日登城之上再度御評議可被遊昨日
 町飛脚差立候間則亦々差立候得夫隨分間ニ逢候何分夫程之心底ニ候得
 夫被遊御安心候段御意被爲在候由必定總州表氏之處一向好事之徒ニ成
 サレ若出府サセ候得夫無謀之議ヲ釀候夫案中彼カ所言者名目ニ而別ニ
 一策ヲ持シ候与之疑ヲ蒙リ候故趣意不相達候併 防公之處御了解相成
 候間別而大幸時宜ニ依而之望ヲ達候義モ有之候半未再度御評議之次第
 未相分不申候 防公モ 勅諭之上夫御猶豫不被遊云々之御決定被爲在
 候由

一名越左州御登庸相成候 兼御側御用人ニ而御軍役奉行 每日御機嫌伺罷出候様云々 御根本被居置御軍備御

治定可相成御趣意ニ候由平仁州自御側御用人承知ニ候得共未御請無之
 候 御側御用人ニ而御軍役奉行 每日御機嫌伺罷出候様云々 兩日中御請被致答候由何分ニ昔日ニ比シ候得夫天地懸隔之
 次第日々正ニ向之勢何分難得之時節罷成候彼是御觀察可被成候山莊義
 御參勤前是非歸府之賦ニ候得夫貴兄モ來春中ニモ太刀頭之御時節可相
 成是而已一同致祈誠候事ニ御座候

【解説】精忠派突出切迫ノコト藩主ノ知ル所トナリ特ニ自筆ノ
 親諭書ヲ盟中ニ賜ハリタレハ同志大ニ感激シ君命ヲ奉シ直ニ
 之ニ對シ時事ニ關シ建白書ヲ添へ連名血判シタル請書ヲ奉呈
 シタルコト及ヒ利通代テ西郷ノ署名セシコトヲ報シタルナリ
 而シテ西郷ハ大島ヨリ之ニ答へ大ニ君命ニ感シ利通ノ友情ヲ
 謝シタリ利通日記萬延年間ノ分ハ在島ノ西郷へ贈リシ書翰ノ
 控ト思ハル、モノ多ク而シテ西郷ヨリノ手簡モ亦アリ以テ國
 事ニ關シ兩者ノ間ニ如何ニ精細ニ文通セシカヲ見ルヘシ

【参考】菊池源吾より大久保等への書翰萬延元年二月二十八日(川上直之助氏藏)

尙々周公旦の御忠膽實に奉感佩候將又波平御刀一條正々堂々の御建議御尤千萬に御座候得共夫を只今取て返し候儀名分上より見る時は必ず殘恨の御次第可止譯に無御座候得共是は先づ其通にて幕え阿從の姿を以本道の御忠略奉願候儀に御座候夫をなせと申せは國奸より幕へケ様〱と申込候て夫より色々讒を構候節は大害を引出し可申候間隠然として御耻を義舉を以被取返候御謀略奉願候此ふた不入儀に御座候得共考の儘申上候○南島にも大和流行病大流行にて死亡多く野生も此節は被相打四五日は相苦候得共無程全快當分は先づ静り候向に御座候

永久丸惠泰丸順惠丸三便の芳翰難有拜見仕候御同盟中様彌以御安康被成御座候由奉雀躍候隨て野生無異消光仕候間乍憚御安意可被下候陳者天下の形勢漸々衰弱の體實に慨歎の至に御座候橋本迄死刑に逢

候儀案外悲憤千萬難堪時世に御座候堀にも些目角相立候様子殘恨の儀に御座候此先生江戸相逃候ては何の策も出來兼候半願くは此一ヶ年の間豚同様にて罷在候故何卒姿を替走出度一日三秋にて御呼返の期相待居候處益報深く罷成尙々恨を生し候時宜にて野生罷登候て又又何様の肝癢差起候も難計幸孤島に流罪中の事故黙止候様との猶豫不斷の輩吟味相付候はんかと苦察いたし居候儀に御座候○先生方御國事は勿論

朝廷の大難も御建白の處餘程御忠誠を被察候儀實に感心の至爲天下國家難有次第に御座候然處不容易

御直書迄の一條夢々如斯時宜に及申間敷と考居候處何とも難有御事只々此死骨さへ落涙仕候儀に御座候畢竟諸君の御精忠感應と飛揚仕候次第に御座候御國家の柱石に相成れとの御文言奉恐入候御事に御座候御請書に付て野生名前迄御書上被成下候儀過分至極痛入候譯に

御座候○到是何分より以難有御儀には
主上確乎被爲涉候との御事何とも難申

本朝の大幸と奉仰候御事に御座候○水陣所を引候始末表に弱を顯し
候姿にて勃興の機相見得候事か一向見留難付候儀と奉存候御正義の
諸侯も必氣を奪候半と遙察いたし居申候○野生御呼返し無之儀は何
方に被拒候哉殘情此事に御座候早捨切居候命爲何生なかれ候哉息の
有限は微忠を奉獻候心掛計にてかく罷在候事に御座候間是非何様の
儀有之候共只々忙然と變を待可申哉罷歸さへ仕候得は彌事を起可申
候間其見込を以一日なり共引延し候策か何分御知らせ可被下候○大
正阿氣の毒千萬の事に御座候

右の通荒々御報迄如此御座候恐々謹言

二月二十八日

菊池源吾

大稅有吉様

御直書拜讀仕候て

思ひ立君か引手のかふら矢はひと筋にのみいるそかしこき
一筋にいらてふ弦のひききにてきへぬる身をもよひさましつゝ
追啓上皆々様色々御丁寧の御品々御惠投被成下誠に難有仕合御厚
禮申上候永樂丸儀は琉球におひて破船にて御座候由肥永岡大人死
去の段津田書面にも細々實悲涙の仕合個様の衰微の世上人傑悉な
くなり候儀可歎可悲

一 久光公及ひ家老島津下總に呈せし嘆願書萬延元年二月

【按】在江戸同志ニ藩ノ事情ヲ告ケン爲メ自ラ出府センコトヲ
請願セシナリ

京師關東之形勢別紙堀士書狀徳田文面之通御座候間御覽可被下候堀士別
亦危急之儀ニ付私出府之儀取起候何分前條通先々手を延き候御趣意ニ相
成候間事を成まの趣向よるゝ御裁斷六ヶ舗候堀士萬一難ニ罹リ候得て外

同志中免るも不致傍觀若哉右様之時宜ニ及る御國家御難題無相違候間
不日出府被仰付候ハ、御當地之形行君意之慮且防公總州之御趣意云々相
通し度畢竟御國許事情委曲不相違候故急迫之決心いふし候譯ニ候得て何
分大事之一條書面よてとても難申越仍亦出府之上篤与申諭何處迄も御趣
意御請書差上候詮相立て度と之素志ヲ以て奉嘆願候

【解説】精忠派カ突出ヲ中止セシ事情ハ在江戸ノ同志ハ未タ之
ヲ知ラサル而已ナラス水戸藩ノ志士ト結ヒ進ンテ井伊大老襲
撃ノコト愈切迫セルノ密報藩地ニ達シタレハ利通ハ事若シ發
スルトキハ堀仲左衛門等ノ危急ハ勿論藩内同志ノ勃發ハ火ヲ
視ルヨリモ明瞭ニシテ去秋親諭書ニ奉請セシコトハ總ヘテ水
泡ニ歸スヘシ故ヲ以テ利通自ラ出府シ具サニ事情ヲ同志ニ告
ケテ一擧ヲ中止セシメントシタルモノナリ然ルニ藩廳ハ猶利
通ノ眞意ヲ疑ヒ遂ニ之ヲ許サ、リキ

一三 堀仲左衛門への書翰

文久元年六月十九日

(牧野家藏)

【按】白石正一郎ヨリ提出セシ書ノコトニツキ依頼シタルナリ

堀 仲左衛門様

別番入

大久保正助

兩日不能拜接候得共愈御萬福奉賀候扱昨朝高崎子入來別番殘置有之白
石一書入用之由ニ相見え候就るも右一書と大兄御方へさし上置るやニ
所存申候間御手元ハ御坐候ハ、別紙之通乍御面倒御取計被成下度をしや
政府之方杯ハ御出も御坐候ハ、形行を以何卒御早々被成置被下候義相叶
申間舖や何歎急用之趣ニ被察候今朝御參旁御頼申上度奉存候へ共些用向
有之何を明日ニも拜眉縷々可申上候其内その由以書中奉願置候以上

六月十九日

【解説】書中ノ高崎ハ猪太郎後ノ五六白石正一郎ハ馬關ノ人勤

王ノ志アリ諸藩ノ志士ト交リ夙ニ其名ヲ知ラル白石ノ一書ハ薩藩ニ何事カ申出ノコトアリ兼テ親交ノ高崎等ニ斡旋ヲ乞ヒタルモノナラン高崎ノ書ハ之ヲ佚ス

一四 御小納戸昇進祝宴案内の名前書

文久元年十月 (大久保家藏)

【按】破格ノ昇進ヲ忝クシ諸方ヨリノ喜ヲ受ケタレハ利通ハ父ト相談シ自家ニ祝宴ヲ設ケ在藩ノ同志知友及ヒ親戚ヲ招キタルコトアレハ本書ハ其際ニ於ケル書付ナルヘシ

壹人 ○、上田源 七外ニ

六人 、山田十介

、友野市助

(燒損) 山口矢太郎

○、早崎七左衛門

三人 ○、皆吉五郎右衛門

三人 ○、成尾清次

壹人 ○、八木源七

(燒損) ○、佐々木新之丞

壹人 ○、兒玉軍兵衛

貳人 ○、山本勘兵衛

四人 、皆吉氏

四人 、藤井氏

(燒損)人 、石原氏

壹人 、牧野氏

壹人 ○、白濱氏

△ 、新納嘉

貳人 、、樺山氏

右類中

壹人ッ、○ 猪俣伊右衛門
壹人ッ、○ 大久保金四郎

奈良原喜左衛門

吉井(仁左衛門)

有村(武二)

高崎(猪太郎)

田中(謙之進)

江島(仲左衛門)

山口(彦五郎)道島(五郎兵衛)

伊地知(龍右衛門)有馬(新七)

本田(彌右衛門)

柴山(愛次郎)橋口(傳藏)

森岡(善助) 森山(新藏)

千田 奎右衛門

(焼損)

伊地知十郎左衛門

西郷(信吾) 吉田(清右衛門)

有馬 ○岩下(佐次右衛門)

町田(民部) 郡山(一介)

川畑 鈴木(勇右衛門)

松方(助左衛門) 谷村(小吉)

是枝 野津(七左衛門)

○日置半藏

右人數不及吹聴

拾五

右類中之儀吹聴のミニ亦祝(焼損)之趣口達ニ亦
爲知て宜舗ハ有之ましくや何分御吟味奉願候

一五

堀次郎への書翰

文久元年十一月十八日

(牧野家藏)

【按】此ノ書江戸ニ在ル伊地知貞馨ニ秘策ノ打合セヲ爲シタル

モノナリ

一筆致啓達候追日微寒相向候處疾ニ御安着御精務被成御坐候半恐悦ニ至奉存候次ニ小生無異毎勤仕候間乍憚御安意可被下候其元形行如何ニ御都合御坐候や不遠御吉左右も可有之折角奉待候去月廿四日去ル十三四日比兩度急飛脚被差立候間追々相達候半与奉存候段々御模様も相變何共難有御互ニ爲天下國家大慶至極無此上就ルニ其元ニ御周旋追々之御趣意ニ基キ是非御成就ニ程偏ニ御頼申上候廿四日急飛脚ニ及御懸合候一奇策相運ひ申候得ル別ニ大幸ニ奉存候何分よも此一舉ニ大事ニ成否判然相分候機會可有御坐候自然岸良士出府ニも相成候ハ、今一ツ策も替了御盡力不被下候ニ相濟間敷候間一盃ニ御籌畫萬々奉祈願候扱此節田中太郎左衛門殿出立ニ付於其元柴田藤五郎云々手數相施度乍併御上ニ御都合如何ニ事候やもし御不都合ニ相成事共ニ候ハ、取止可致小生義及相談候間何分存慮承度与ニ事ニ御坐候依之小生返答いふし候ニ幸堀出

府中之事ニ候間御趣意ニ程篤与御相談堀考次第ニ御手數相成候可然尤其趣書面を以申越置候与ニ處ニ申置候自然御引合可致候間何分思召を以宜敷様御諭置被下度奉願候亦御仕ひ場も可有之と存上候間旁御賢慮次第御取計可被下候其後格別相變候義も無御坐候上ニ處愈動キ不申候折角諸事地盤相居候處專要と盡力一盃周旋ニ時宜御坐候一々何も難申上御親察可被下候今日出立ニ付殿中ニ艸卒ニ文面且亦態与細事不申上候間御推讀可被下候要用迄艸々如此頓首敬白

十一月十八日

大久保 正 助

堀 次 郎様

【解説】利通ハ是ノ年十月貞馨ト共ニ小納戸ニ拔擢セラレ君公ノ近侍ト爲ル是ヨリ先利通ハ側役小松清廉・小納戸中山實善等ニ據リ時事ニツキ屢々建言スル所アリ久光公モ亦夙ニ齊彬公ノ遺志ヲ紹述シ一藩ヲ舉ケテ國事ニ盡力セントスルノ志アリ

シカ是ニ於テ利通等ノ意見ヲ納レ意ヲ決シテ愈明年春ヲ以テ上京ノ期ト爲ス依リテ先ツ貞馨ヲ京都及ヒ江戸ニ遣ハシ出府ノ準備ヲ爲サシメ同時ニ忠義公參覲ノ期至ルヲ以テ重ネテ幕府ニコレカ猶豫ヲ請ハシメタリ然ルニ當時コノ事ハ頗ル至難ノ事情ニアリシヲ以テ利通等ハ更ニ議シ已ムヲ得サル最後ノ策トシテ江戸三田藩邸ヲ燒キ之ヲ名トシ參覲ノ延期ヲ出願スルニ決シ急使ヲ以テ之ヲ貞馨ニ報シコノ事ニ盡力セシメタリ書中一奇策云々トアルハ即チ藩邸燒失ノ秘策ヲ云ヒシモノナリ宛名ノ次郎トアルハ仲左衛門ノ改名ニテ翌年又小太郎ト改メ後更ニ伊地知壯之丞ト稱シタルナリ

一六 堀次郎への書翰 文久元年十二月五日

(牧野家藏)

【按】江戸ニ於ケル其ノ後ノ狀況ヲ問ヒタルナリ

一翰呈上仕候追日寒氣相向候處愈御安泰被成御精務奉拜賀候次ニ小生無

異毎勤仕申候間乍憚御安慮可被下候其元御都合如何ニ御坐候やもこや御左右到來之時分与折角御吉左右奉待事ニ御坐候兩度急飛脚被差立申候間疾ニ相達御趣意通旁御奔走周旋被成下候筈實以御難問之御義ニ奉親察候乍併最初より御任之事ニ私共ニ至リ安心仕居候其元形勢追々承申候處愈急迫之時宜ニ相成候由日下首尾克着ニ亦尙亦現事承候得と長藩上下振起之次第感伏仕次第ニ御座候彼是模様御賢考相違之向も有之何之筋もても易圖場合も可被爲在實ニ機會ニ奉存候仙臺御參府御免肥後姫君國御暇かとの大なる賄賂ニ亦相運ひ候段相聞得左候得ハ御參府一條之事も与程被成安き場も可有之奉存候於御當地も日々御盛大之御處置も相成白石一條かとも願意よりも十分相運ひ三木も掛リニ亦出關被 仰付候御軍役方も大抵地盤相居候向ニ相成其余少長之次第ハ紙面も難盡何も御察可被下候當分ニ亦も御左右相待一扁も御坐候未中山岸良兩士之一左右も無之もふ疾着之時分御坐候得共如何様長舟中歟不遠何分

相分可申候委曲申上度奉存候得共別亦多用ニ得申上候詰所ニ亦艸卒
之文面御推讀可被下候敬白頓首

十二月五日

大久保正助

堀 次 郎様

【解説】書中「白石一條おとも」云々トアルハ馬關ノ志士白石正一
郎ヨリ何事カ願出テタルモノナラン又中山ハ尙之助實善ニテ
是ヨリ先朝廷ニ御劍献上ノ事及ヒ近衛家トノ縁談ニ關スル用
向ヲ兼ネ且ツ久光忠義兩公勤王ノ精神ヲ近衛忠熙ニ通スル爲
メ京都ニ使シタルナリ岸良ハ奥小姓タリシ彦七ニテ中山ト共
ニ上京シタルナリ

一七 同志姓名錄 文久元年

(大久保家藏)

【按】姓名ノ下ニ記入セル年齢ヨリ算定スレハ文久元年ニ相當
ス何ノ爲メニ列記セシヤ明ラカナラス或ハ久光公東上ニ付キ

隨從ノ士ヲ同志中ヨリ推薦セシ際ノモノナランカ

- 有 馬(新七正義) 谷 村(愛之助昌武)
- 伊地知助三十七 敦(龍右衛門正治) 松 方(助左衛門正義)
- 吉 井無役三十四 仁(左衛門友實) 森 岡(善助昌純)
- 江 夏産物方書役三十四 仲(左衛門榮享) 永 田(佐一郎)
- 有 村無役後齋信義三十四 神宮司(助左衛門)
- 鈴 木四十三 勇(右衛門重高) 柴 山(龍五郎景綱)
- 税 所三十五 喜(三左衛門篤) 大 山(十郎)
- 奈良原喜八 二十八(喜八郎繁) 伊地知(源右衛門)
- 野 津二十七 八(七左衛門鎮雄) 柴 山(愛次郎道隆)
- 仁 禮三十位 平(助景範) 橋 口(傳藏兼備)
- 道 島二十七 五(五郎兵衛正邦) 高嶋三(一次)
- 森山棠四十 棠園(永賀) 中 島(健彦)

田中謙二十七(謙之助盛明) 房 村(猪之助)
 高島清廿位 田 代(稻磨義徳)
 西 郷廿位(信吾從道) 深見休八(有幸)
 村 田二十七(新八經滿) 木藤彦次郎
 山 口二十三(彦五郎) 大野四郎助
 平 山二十七(新助) 高崎善次郎
 本 田三十四(彌右衛門親雄) 竹内三十郎
 大山彦三十七(彦八盛美) 木田謙
 坂 元二十六(彦右衛門) 三 島(彌兵衛通庸)
 鈴木源廿位 川井田
 森山新十九(新五左衛門永沼) 坂元城
 野津七次 十八(道貫) 吉 田(清右衛門)
 鈴木昌十九(昌之助) 大 山(彌助慶)

有村廿位(幸藏國彦)

楠田助

坂 元(六郎)

赤 塚(源六眞成)

山之内(作次郎貞奇)

上五代東一郎

一八 久光公上京道中警衛等言上の覺書 文久二年三月(大久保家藏)

【按】文久二年春久光公初度上京ノ際御供其他途中ノ注意等ニ

ツキ言上シタルナリ

一御小姓之義是迄之御參勤御供拾四人ニテ相濟來候へ共此節之義ハ今六
 人も被相嵩御番方御供方三組ニ分七人宛ハ是非御番御供輪番爲致申度
 候

一御小人足輕相應相嵩度候御供人數荷物成丈輕辨ニ被 仰付度候無據當
 用之品許外ハ蒸氣船よリ被差廻度候

- 一 御泊之場所吟味行届度候
- 一 御通行御泊之宿迄是非夜不入内ニハ御着ニ相成候様御宿割有之度候朝
モ其通ニ御燈灯(燒損)上御立ニ相成度候
- 一 御草履取兩三人之(燒損)相嵩度候
- 一 守衛人數
- 御立前々日貳拾人計被差立度候御立前日同斷一日御跡より同斷二日御
跡より同斷
- 一 御駕籠脇に別段ニ貳拾人計御召列被 仰付度候
- 一 御泊之驛夜廻是よりも念入半時ツ、不寢番ノ内より其外無絶間繼廻ニ
可被 仰付候
- 一 蒸汽船御發足當日出帆小倉に相廻待上居小倉 御渡海兩日計見合出帆
大坂河口迄相廻居大坂 御出立後七日計ハ見合居出帆江戸之様相廻度
候

御先荷御跡荷等ハ都々蒸氣船へ御積入相成度候

御滞府中ハ江戸へ滞船罷在度候二艘も有之候ハ、(燒損)入ニハ壹艘ツ、
ハ是非滞船被 仰付度候

一 若哉御泊之節出火騒動等有之候節ハ卒爾ニ御まつし無之様自然 御本
陣ニ火相ある候節ハ(燒損)之所へ御はまて第一ト奉存候

【解説】是ヨリ先利通等ハ齊彬公ノ遺策實行ニツキ屢建言スル
所アリシカ久光公ハ遂ニ忠義公ニ代リテ東上シ國事盡力ノ意
ヲ決シ利通ト伊地知貞馨ヲ拔擢シテ小納戸ト爲シ先ツ兩人ヲ
シテ豫メ江戸及ヒ京都ノ事情ヲ視察セシメ愈是年三月十六日
精兵千餘人ヲ隨へ威儀堂々鹿兒島ヲ發シ上京ノ途ニ就キタル
ナリ尙ホ久光公上洛前年即文久元年ノ冬ヨリコノ年ノ春ニ亘
リ諸藩勤王志士ノ密カニ入薩シ久光公ノ上京ヲ好機會トシ公
ヲ戴キテ事ヲ舉ケントスルモノ相踵テ起リ殊ニ平野國臣(當時

姓名ヲ變シテ藤井五兵衛ト稱ス)及ヒ眞木保臣ノ如キ皆薩摩ニ到リ大ニ運動スルトコロアリタリ次ニ參考トシテ之ニ關スル書翰三通ヲ收ム

【參考】其一 平野國臣より大久保への書翰文久元年十二月十四日 (大久保家藏)

略封御高免

大久保 正助様

藤井 五兵衛

貴 酬

御昏上拜讀仕候早速御上達被成下候よし大慶不過之候且被爲入御念一兩日相待候様被仰越難有奉存候御含ミ通餘人面會書通一切相慎只々御決着之御沙汰謹而奉禱上候必々御懸念被下間敷候貴酬迄 匆々頓首

臘月十四日

【參考】其二 眞木保臣より大久保への書翰文久二年三月十八日 (大久保家藏)

寸牋謹啓仕候時下春暄ニ御坐候處益御多福奉大賀候然者此節中務大輔様を修理大夫様の使者として不破左門被差立候處私義於御藩舊知之人有之候間情實申演可申爲ニ差添被遣候小松殿尊兄様當ニ罷出候處御兩所様共ニ御出京御留主之由承リ候間昨夜直ニ吉井中助殿の書中ニ御頼申通候間朝來旅宿の御出被下荒増御内談申上置候然處尊兄様ニ之御在國之由只今亭主を承リ申候是迄御寵顧被成下末之義も御坐候間猶又御配慮御願申上度可相成ハ急々拜謁委敷御相談申上度推參仕候亦宜敷可有御座哉御差圖被下候様奉希候尤吉井君の申上置候間御同氏被仰合萬事宜敷御取就被下候様仕度去年來之御禮も申上度何分速ニ拜面仕度奉存候 艸々頓首

三月十八日

二白推亦罷出候亦之亭主迷惑之様ニも相聞候處尊兄様を御差圖被下候ハ、差支も有御座間敷何分宜奉願候

大久保 一藏様

眞木 和泉守

几下

【参考】其三眞木保臣より大久保への書翰 文久二年五月二日

(大久保家藏)

謹啓時下不順ニ御座候處愈御萬福可被爲在大賀奉存候次ニ野生無恙罷在候乍憚御降心可被下候然ハ私義三月晦日鹿府出發日州路婆娑仕豊後佐賀關々小舟ニ亦四月廿一日稍夕浪華ニ到同廿三日深更京御屋敷ニ參リ御混雜ニ央ニ不一方御厄介相成申候其内疾速御寓居ニ罷出是迄之御禮等可申上之處一夜之嗽ニ付相控申居候然處此節大坂國屋敷被引渡私共身柄之儀ニ付
叡慮之趣并 公子御仁惠之思召等委敷被 仰遣候由同屋敷役人方申聞候何處までも御手厚之御事深々感佩奉存候此節御依頼之浪人共一枚之義ニ去御坐候得共私義ハ殊更之儀ニ御坐候亦實ニ奉謝候辭も無御坐候乍憚貴公様方御序御坐候節ハ宜敷被仰達可被下候扱國方ハ罷

下候ニ付亦去天之一涯懸絶仕且如何相成可申哉も難測候得共 公子御事業之御始末ハ承知仕度其節ハ必御召登被爲遊候様奉願度上書相認帶刀殿ハ差出申候乍此上貴公様御口を被爲添私共志願之義相叶候様御取就可被下候右ハ春來御寵顧ニ奉預候御禮申上度旁奉呈寸楮候恐惶頓首

五月二日

眞木前司

保臣

大久保 一藏様

一九 利通日記抄(西郷と耦死を謀るの條) 文久二年四月

【按】文久二年四月久光公上京ノ途西郷ハ事ニ因テ公ノ激怒ニ

觸レ將ニ死ヲ賜ハラントセシカ當時利通ハ大ニ之ヲ憂ヘ西郷

ト共ニ耦死ヲ謀リシコトアリ茲ニ其際ノ日記ヲ抄出シ且ツ參

考トシテ本田男爵ヨリ税所子爵宛ノ書翰ヲ下ニ收ム

三月廿九日晴

一 今日御滞在

一 中山の云々之譯有之論判いさし候

一 昨夜白石正一郎が一封落手愈諸藩士浪人切迫追々出坂大事之勢顯然
 きて此一條於御國元聊憂ふる處にて屢小松家中山に示談終ニ激論ニ及
 ひ候譯も有之且建白よも及ひ不敬ヲ願す顔を犯し候時宜よも至り候得
 共實に至誠之貫き得ざる故言行はれを一身を恨外無之然ルニ當所まで
 出懸候處前條通現事差見得黙止るさく今日幸宿衛ニ付切ニ建白ニ及候
 處云々出坂被 仰付小松に談合可致
 御沙汰ニ付寸時旅宿へ差越則舟都合等手當相成候亦々出勤言上中山に
 代合退出
 一 岸良士入來段々及論談候
 一 今夕風雨ニ相成出舟不相叶候

三月卅日雨

今朝随分平和相成出舟いたし候(中略)

四月五日雨

今曉より風雨(中略)夜入五時分着坂いたし候加藤の引合候處堀子過刻御
 中途に差向出帆之由承候今晚寅屋に着候加藤伊十院參候

四月六日晴

今日早天御留守居に罷出四ツ時出帆伏見に差向候夜入前伏見に着候則
 御假屋に差越候處彌右衛門其外大島森村三士の外出よて兼春に一宿四
 ツ時歸館故則差越候彼是京地模様等承別る大機會ニ候且大島の少々
 議論有之候處一盃振とまて故先ツく安心いさし及鶏鳴候

四月七日晴

今九時分打立歸帆天氣宜格別之景色ニ候八幡に參詣心願を凝し候尤
 狐渡りと申處の上陸橋本に下り乗舟いさし候七ツ時分着坂いさし候今

晚則舟手當いさし大藏谷之様差向候處順風宜舗候

四月八日

今日八時分大藏谷へ着舟未

御着無之七ツ時分 御着堀氏未滞リ居候先被參候間段々咄承了且大島一條承知故云々申置奈良喜士入來有武士入來云々承大鐘時分堀士の鳥渡逢否承候處不分明則小松家の差越云々歸懸堀子行逢旅宿の同伴云々論し候

御本陣之罷出候處既ニ御引ケニ候

四月九日雨

今日御供六ツ前出勤六ツ時分

御立七ツ時兵庫へ

御着大島風与參タリ云心中中々難堪候尤森村も參有村宿の參居候篤与申含候處從客として許諾拙子も既ニ決斷を申入候何分右通よて安心ニ

亦無此上則

御前の相伺候處奈良海江拙子同船大坂ノ様廻舟可致

御沙汰ニ候今晚舟都合致候得共順風不宜出帆不相叶拙者旅宿へ一宿

四月十日雨

今日大雨よて候處四ツ後晴上リ直様出帆致し候處八ツ時分着舟尤上陸不致御届申出候様承知故則帶刀殿へ届申出候大鐘時分御用ニ罷出候處今晚申出帆候舟有之候ニ付乗舟致し御國元之様歸帆可致承知

一今晚中舟仕舞不相調

四月十一日晴

一今日四時分出帆ニ付本船へ三子乗付拙者共三人相送り候其段帶刀殿の届申出候

一拙子大島一條ニ付亦春初御請合申上置候趣有之候ニ付帶刀殿の申出候趣有之出勤差控候(下略)

【参考】本田親雄より税所篤への書翰 明治三十一年一月十九日

文久二年の春の頃予は伏見の薩邸に在りて島津久光公の近き間に登り着せ給ふ用意様々に忙はしかりけり 公此時和泉と稱し給ひけるか諸國の有志浪人なる者夥しく京伏見に集ひ

来て之を待つ

公は去年來藩内に布告して我三州 薩 隅 日 を擲ち舉て

朝廷の御爲に力を盡さむものと時の幕府をも聊か憚る色なく公然たる訓令を發し給ひし程に之を傳へ聞く諸藩の有志は勤王の志を果せるは此時此人なりと雀躍憤起して公の上京を今や遅しと指を屈して待つものゝ如し京伏見の藩邸に來りて泉州公の舉動を探り意志を尋るなど其狀今にも討幕の一擧になりぬらんかと騒きひしめくさま 事 だ は 略 し ぬ 筆 紙 に も 盡 し か た き す ま し き 光 景 な り け り 此 時 公 に は 同 し く 三 月 十 六 日 に 鹿 兒 島 を 立 せ 給 ひ 播 州 室 津 に 着 か せ 給 ふ と 聞 折 し も 南 洲 翁 隆 盛 は 森 山 新 藏 村 田 新 八 の 兩 士 を 伴 ひ て 我 伏 見 邸 に 來 訪 あ

り大島より召歸し給ひぬとは聞しかと何の音信もなかりし頃なれば俄に顔見合せて何と言ひ出る言葉も忘れてまつ無事を祝し時世の様など打語ふ此時堀二郎 伊地知 實 隆 も 江 戸 よ り 來 り て 爰 に あ り け り 翁 は 姓 名 を 大 島 三 右 衛 門 と 變 稱 し て 幕 府 の 嫌 疑 を 避 け 外 邊 に 出 る に も 深 笠 を 冠 り た り き 翁 の 此 邸 に 來 り し 事 を 探 り 知 り て や 平 野 二 郎 藩 士 訪 ひ 來 り て 談 深 更 に 及 ぶ あ の 日 も 他 藩 の 輩 尋 來 り な ど す る を 避 ん と て 文 珠 と い へ る 旅 店 の 奥 ま り た る 坐 敷 に 在 り て 翁 と 人 々 と 終 日 終 夜 語 り く ら せ し も 爰 も また 薩 摩 の 人 々 泊 り な と し て 翁 の い と は し き 事 の み 多 か れ は 去 り て 宇 治 の 里 あ た り に 物 せ ん と て 打 列 れ 立 て 萬 碧 樓 に 登 り 朝 日 山 に 對 ひ 清 流 に 臨 み て 酒 く み か わ し つ 浮 世 の 外 な り け り と 翁 は い と よ ろ こ び て 今 宵 は 爰 に 宿 り ぬ へ し と 定 め 初 夜 に も 成 ぬ る 頃 し も 使 の 者 參 り て 伏 見 よ り 御 文 の 候 と て さ し 出 し た る を 見 れば 甲 東 兄 利 大 久 保 の 急 報 に て 公 駕 兵 庫 に 停 り 給 ふ 隙 に 寸 暇 を 給 り て 要 用 を

告んものと伏見郡に来て見れば本田は如何なる事そやかゝる世の中に西郷など打列れ立て宇治の川逍遙に物したりとは實に驚きたる振舞かな速に歸り給へ云々とあり沈着慎重なる甲東ぬしか君側を離れて爰まで馳せ登りたるは至急至要の事こそあらめ急き歸りなんと人々ひしめきぬ翁は大久保爰に來りなは共に美景をもなかれて杯酒の間に物語りもすへきものを例のやかましき男かなと戯れたり爰より歩みゆかかも程遠しなと人々いふ船により河を下りなは如何に早からん宇治の柴舟に打のりて清流に掉さすもよかるへしと漕出ぬれば四月初頃の月影さし登りて波の上に浮へる景色は所から面白く舟は矢を射る如く早し此趣は得かたき佳境になんといへは翁は打笑ひて河水は流るゝもの月は望になれば團くなるものよ何のめつらしき事やはあるとねちけさまに答らるゝもおかし
邸に歸り着ぬれば甲東兄とくより待かねて先づ翁にむかひ問を起し

君は京攝の間に奔走して諸浪士ともを語らひみち引て煽動し云々と聞し召給ひて公の憤り給ふ處となりぬさる事のあるへき謂れなしとおもへと如何にも此上なき大事件なれば此事の顛末を糺しかつは京攝の現状をも見むものと公の許可を得て急き爰まで來れる也冀は洩るゝくまなく浪士の情況と君か執る處の方針を聞んと至情面に顯れ意氣共に切なり翁は答るに下ノ關より大坂伏見等に至るまで諸浪士の意志その裏面に伏する形勢を縷々數千言演へ盡して又餘蘊なきものゝ如し而して容を改めて曰く予は浪士を誘ひもせず又嫌ひもせず只彼等無謀之舉に出て却つて大事を誤るを恐るゝか故に今日まで彼等を説き鎮靜せるをむねとせしは一坐の諸君皆知る處にして我か任する處也我一度足を舉て此の地を去らば恐らくは無事を保ち難かるへし云々爰におひて甲東の深憂疑團も氷解して互に時事を談しける中に早曙光の東天にはのめく頃しも又急に走りて兵庫をさして馳

せ下りぬ

此意想外なる南洲と甲東の間答の眞に驚天動地禍線の曳く處とは
後にそおもひ合せらる

其翌日になりて京なる田中國保か許より飛翰來る中に長井雅樂長利州
家老のなる者より朝廷に建白せる草案あり大意は世の浪士不逞の徒等
勤王攘夷を名として討幕の策を内議し天幕の間を妨げ機に乗して自
己の慾を逞うせんとする者にして決して近づく可らず就中攘夷の策
は幕府に於て深謀あり大藩巨族に命して必ず爲す處あり又西洋各國
は大砲巨艦の利器ありて今日の日本十を以てするも敵すへからず其
軍艦數千艘あり日本の環海に木の葉の浮ふか如く來り圍むこと半年
乃至一年ならば海路全く交通を絶る帝都も江戸も一步動く事叶ひ難
かるへし又幕府の深謀をも不知浪士等薩藩士と結び島津和泉を擁し
て既に上京近きに在りと傳ふ若し伏見へ着せは速に島津を停め而し

て天幕の間を調和なさゝれば 禁廷の御大事を醸さん島津に御示諭
の事は命を受けなは長井躬ら當らん云々此建白や密に堂上公卿の間
に説き廻りて稍同意を感じる方々もありとの説ありし翁の之を聞く
や是實に輕々看過すへきにあらす我れ大久保と談したる末爰に留る
と雖此事至重の關係あり我れ此建白を携て公に謁して深く説破する
處あらんとす堀は是より大坂に下り云々すへし本田は京都に登り田
中と談して云々すへしと部署を定め各東西に袂を分てり却説予は翁
の示すか如く京師に至り更に大坂に下りて公の旅館に伺候す邸吏の
舊例也
即時甲東の旅寓を訪ふて西郷翁の馳せ下りし所謂をいふに主人竊に
答へ告げて曰く去れは其事也過きし夜兵庫なる公の御旅館に西郷來
りて長井建白の事に付拜謁の爲に參上せりと其趣意は云々也と説き
終るを待たす予は此處大事を談するを得す外と部に出てんと兩人は
月夜濱邊の人遠き物蔭の砂上に對座して甲東伏見より歸り兄(備前)か浪士

鎮撫の始末其心事のある處を詳に公に言上せしも公の震怒の意志翻すべくも見へず甲東の歸らざる前既に小監察喜入某に足輕數人を附して兄を捕縛の命は降りたりと聞く拜謁の願はさて置きつかゝる境遇に落入たれば予も君側を退けらるゝの狀況あり多年盡瘁せし大計畫も爰に至ては書餅水泡に歸せしは是非もなし之れ天命也願ふに兄謂れなく奸吏の手に捕縛せらるへきにあらず必定自裁して死すなると予は之を止むる者にあらず予も今は此世に生きて何かせむ只死あるのみ死せば必ず兄と共に耦刺へて死せんこれ我志なり志既に決せり故に此の無人の處に伴ひし也と告ぐ南洲聞終りて従容として對へけらく此は大久保の言とも覺へぬものかな公の激怒と君側の形勢如此に至りしは今更是非もなし予は君か想ふ如く自裁處決するものに非ず縦令縲繼の辱めに逢ひ如何なる憂目を見るとも忍んで命に従ひ大計の前途を見んと期する者也君も亦如此なるへし若し今にして

吾等二人とも耦刺して死せば天下の大事去らんかくまでに推し進み來れる例の畫策は誰か之を繼紹すへき男兒忍耐事に當るは此時ならずや吾人二人なくしては皇室を如何んかすへき國家を如何んかすへき辱を忍ひ事に耐るは只此時也勉むへし々々々と懇ろに説くを聞て予も深く此言を信じ決心を飜せりと

兩雄は天下の大事を其雙肩に擔ひて深く自ら任したる志意の高尙にして氣宇宏廓なる大謀偉略眞に廟廊の器にして人中の龍とも稱すへし兩雄の死地に就くと活路に出しとは我帝業中興の存亡に無二の一大關門たりし事を思へは此一刹那の死活其機は間髪を容れず此時若し甲東の一言南洲同意せば奈何爰に兩雄を世に生かせしは是れ天の王室を助け帝國を興すの賜にあらずや眞に我皇祖皇考の神靈冥助を垂給ひしものに非らずして何そや

語り畢て歎息一聲此事たる眞に秘中の秘なり言もし外に漏れなは萬

事休すへし前後の事情を洞察して深く心に納め置給へと云々物語りして別れたり此一言予心に銘して明治十一年大久保侯の薨するまで口に登せざりし去程に南洲翁は如何にしていつこにありやと種々探る中に安治川口にありとの事に數百艘繋きたる小舟ともをさかし求るに夜初更に至りて求得て飛入り見れば翁は舟中に平坐し居たり村田森山も側に在り如何にや々々々と安否を尋しに翁は勤王道樂のなれの果也と呵々と大口開ひて笑ふ與力兒玉某足輕召列れて添居たりやかて加藤十兵衛尋ね來れり甲東また來れり暫くして奈良原喜左衛門海江田武次來り監守の任を命せられたりといふかく人々集ひたれば小舟の中所せくまでこみ合ひ兒玉を諭して大川を出帆までの間陸に上りとある離れの亭を借りて人々終夜物語りぬ夜もしらしらと曙なんとする頃甲東も去り予もまた伏見にと別れて歸りぬ翁の舟出はいつなりしかまた何かたに如何なる處置になりしやおぼつかなきかきりなれと得

知らず

けさしもわか草庵を訪らひ給ひて三十餘年前のむかし語りのゆくりなくも南洲甲東の事にはなし移りてけるを世の中の塵打拂ふは物忘るゝにそよき心構へなれとおもひしものをかゝる事跡は世に知る人もなしこれはかりは忘れたくもなしいさやそのありしまゝ聞しまゝの光景を筆に染めて置ねかし明日は泉州に歸らむとおもふ程にけふの中に記し給へやといふにやをらわれも忘れぬうちに燈をかゝけて書つゝりておくる

明治三十一年一月十九日夜

榎 塘 (豊本田男爵)

鵬 北 老 (臺税所于爵)

研 北

吳竹の世にもまれなる一ふしのむかしかたりを君わすれめや

二〇 久光公へ言上の覺書 文久二年五月十三日(大久保家藏)

一 守衛人數十組御邸又々寺院に被召置候事

一 小河人數當分通被召置候や否之事

一 關東表久世上洛之左右有之候尤明十四日打立來ル廿九日着之事

【解説】小河ハ一敏・豊後岡藩士ナリ寺田屋事變ノ後關係セシ浪

人志士ハ各皆其藩へ下セシカ小河等ハ當時京都薩藩邸ニ滯留

セシナリ久世ハ老中廣周曩ニ勅命ニ依リテ上洛ノ筈ナリシモ

大原勅使關東下向トナリタル爲メニ中止セリ

二一 堀小太郎への書翰 文久二年七月七日 (牧野家藏)

【按】此ノ書利通カ勅使大原重徳ノ補佐タリシ久光公ニ隨從シ

テ江戸ニ鞅掌中堀ニ贈リシモノナリ

堀 小太郎様 大久保 一藏

貴 答

今朝と貴翰難有拜見御沙汰之通昨夜之潤雨ニ心持清凉殊

一橋公愈昨日差向御請相成先ツ御互ニ奉大慶候越之村田如何之模様

御坐候や承度且亦土佐一條ニ付御口合申上度義も御坐候間明日御出

殿被爲在度奉願候此旨御答旁奉得御意候已上

七月七日

追々大原様御方御太儀奉存候明日御國元急飛脚被差上候間爲御

知申上候

【解説】久光公ハ是ノ年三月大兵ヲ率キテ上京シ朝廷ニ建言セ

ラル、所アリシカ朝廷公ノ意見ヲ納レ勅使ヲ關東ニ下シ公ヲ

シテ補佐セシメラレタルナリ當時利通等ハ齊彬公ノ遺志ニ基

ツキ久光公ノ建言セラレタル一橋慶喜ヲ將軍ノ後見ニ松平春

嶽ヲ政事總裁ト爲スノ勅命ヲ幕府ニ奉セシムルコトニ極力幹

旋セシカ慶喜ハ遂ニ是ノ月六日ヲ以テ春嶽ハ九日ヲ以テ共ニ

勅命ヲ奉スルニ至リシナリ村田ハ越前藩ノ重臣巳三郎勅使奉
請ニ付キ頻リニ説クトコロアリ又當時利通ハ屢各藩ノ有力者
ト會見シ國事ヲ談シ親交ニ努ムルトコロアリタリ(日記參照)

【參考】周布政之助より大久保への書翰 文久二年六月十一日

昨夜ハ高樓ニ陪遊御厚誼之程萬々奉感謝候俚歌催醉ニ座一堪兼候
ニ付御醉夢中不敬之至候得共勇退眞平御海寬奉希候杯前略申上候通
明十二日御手透ニ被爲成候ハ、數寄屋河岸船宿萬年屋ニ亦小船を舩
候而御來臨を可奉待必々兩君御一同御越可被下僕も今日
天使拜謁相濟を候て來ル十六七日頃出立之積罷居最早緩々拜芝得可
申程無覺束奉存候今日御繁務中乍御妨御光臨奉希候九郎兵衛も其節
拜謁可仕候御禮御答旁具呈寸簡候頓首

六月十一日

再白昨夜樓上ニ亦汚玉礎候處酒氣勃々不能採筆候ニ付乍序左ニ

錄上配正是祈

西來意氣轉乾坤一世雄風十字幡京攝春殘花下巷遠參夏淺綠陰邨皇
州今日綱維舉古道千秋神聖存我亦聊懷憂國念向君咄々吐和魂
堀老臺所示近製佳什攀其瑤礎却奉呈併乞教正 戲拜具

大久保

兩老臺

函丈

政之助

敬呈

二二

堀小太郎への書翰 文久二年七月十日

(牧野家藏)

【按】江戸ニ於テ堀ヨリ來談ヲ求メシニ對シ答ヘタルナリ

堀 小太郎様

大久保 一藏

内 用

先刻ニ貴翰拜見無據故障有之得罷出不申乍殘念御斷申上候兵部様ハ可
然様被仰上置被下度奉願候任序此ハ御斷申上候以上

七月十日

【解説】書中ノ兵部ハ吉井友實ニテ時ニ大原勅使ノ護衛ト爲リ

山科兵部ト變名シ居リタルナリ

二三 生麥事件に關する傳達書 文久二年閏八月十五日(大久保家藏)

【按】本書ハ利通カ生麥事件ニツキ久光公ノ意ヲ受ケテ佐土原

藩ノ側役タリシ能勢直陳 時ニ次郎左衛門ト稱スニ 與ヘシモノナリ

一岡野新助夷人殺害(燒損)形行御届相成候處夷人申立之筋齟齬いし是非探索ハ勿論見留人差出候様幕府より岐度御當之趣有之岩山八郎太内田仲之助急ニ致上京候得共最初より有躰之形行を以御届相成候事ニ候得ハ如何様嚴敷 御達有之候共事實相違之譯無之候得モ今更御届替難相成儀ハ勿論見留人等被差出ニ不及前意ヲ以御突切此上なるら於幕府應接被出來兼候ハ、薩州の回船いし候様御達有之度左候得ハ於薩州彼等(燒損)落着出來候様

皇國之御瑕瑾不相成聊國威を失はず事實明白應接可仕之大意ニ岩下佐二右衛門吉井中助高崎猪太郎の御含メ相成急出府被 仰付候詳悉之儀ハ當人共心得居候事

一右ニ付篤与被爲及 御熟慮候處幕府前條之次第内外主客之取違有之候様思食候外を跡にし内を親ミ眞實

皇國之御爲を存公平之論ニ出候得ハ應接を以夷人ヲ鎮撫せる道ハ如何様共有之全く私ヲ離を双方ニ偏倚をすして思食候亦も全躰大名之行列ハ作法嚴密ニ國内之人ニ亦も無禮を働候得ハ切捨いし候習ひ況乎夷人ニおひてハ猶更之事彼是之分も有之依亦當日薩州通行ニ付徘徊無用ト令し置候夫をも用ひを徘徊いし候ハ曲其方ニ在り且亦無躰ニ行列に乘驅候ハ大ニ失禮ニ相當之其方ニ於るモ作法不案内ハ勿論之事此方ニおひてゐねて非常を戒免候職分之者ニ亦主之爲ニ右式ニ及候ハ日本之氣風ニ亦臣子之本意トせる處ニ候得ハ此方ニおひてハ左ノミ答

むるき譯ニあらむ其方之申立る處且人を害候譯ニ候得て糺明之上處置を可加候得共當人其場逝去リ國內廣大ニ急ニ尋得て精々探索中ニ事候ニ付如何様火急申立候共其外ニ致様無之兎角探得候迄ハ静リ居候様理を盡し應接相成候ハ、其上枝葉之事申立候義ハ屈服致させ候道ハ如何様共可有之大體之筋を立右之趣意ニ押通候ハ、別段配慮ニ及ましく思食候事

一幕之趣意ハ是非本人差出可處嚴刑賦ニ被伺候處全躰

皇國如此之衰躰人心紛擾治亂之機ニ隣國候ハ畢竟夷人渡來より根據を譯且詰り攘夷ト申ハ先々より確乎せる

叡慮ニ被爲 在天下ニ顯然たる御事ニ候加之未曾有之聖斷ヲ以

敕使被差立公武御合體萬民安堵上下一和復古之基本開かせらむ夫カ爲ニ一橋越前出頭相成於幕も

朝廷尊崇之道相立

皇國を世界第一等之強國ト成し寛永度ニ被復度大變革之御初政之時節切迫右様内外取違之御取扱有之候も天下人心之居合ニ於る如何可有之哉薩州人心ニおひてハ先般堀小太郎一條ニ難制止之企ハ差扣居まして此節之譯ニおひて憤激十倍し候ハ案中也克々熟思候得ハ第一幕府之爲不宜天下之失望ニ相成候義ト思食候右邊篤与御勘考之上越前御演說切迫之御議論有之度御沙汰候事

【解説】久光公ハ勅使警衛ノ任ヲ終ヘテ八月廿一日江戸ヲ發シ西上セシカ其途生麥ニ於テ英人四人公ノ行列ヲ犯セシヲ以テ從士之ヲ殺傷ス生麥事件即チコレナリ薩藩ハ江戸留守居ヲシテ取敢ヘス加害者ハ先年脱藩セシ足輕岡野新助ナル旨ヲ幕府ニ稟申セシメシカ幕府ハ英國ノ抗議ヲ懼レ薩藩ニ命シテ嚴ニ

加害者ヲ搜捕セシム既ニシテ英國ハ果シテ幕府ニ對シ若シ速ニ犯人ヲ出サ、レハ軍艦ヲ回航シテ直接薩藩ニ請求スヘシト嚴談ス時ニ久光公ハ復命シテ京都ニ在リシカ乃チ岩下方平等三人ヲ江戸ニ急行セシメ生麥ノ事ハ曲彼ニアル旨ヲ以テシ幕府ニ交渉セシメ更ニ當時在京中ナリシ佐土原藩ノ能勢直陳ヲシテ江戸ニ往キ政事總裁職松平慶永ニ對英策ヲ進言セシメタリ本書ハ即チ利通カ公ノ意ヲ受ケテ交渉ノ要點ヲ摘記シ能勢ニ與ヘタルモノニテ利通ノ日記ニヨレハ閏八月十五日能勢ニ交附セシモノ、如シ蓋シ能勢等カ翌年薩英戰爭後ノ和議談判ニ盡力セシハ故アルナリ

二四 小河彌右衛門への書翰 文久二年閏八月廿二日

貴翰拜見今朝ハ
不容易

御書附御拜戴之由萬々奉賀壽候就而も早々旅宿へ御見舞被下候段痛入奉存候明朝弊邸へ御出ニ付刻限之儀被仰下候付何分早目之方仕合奉存候此旨貴酬迄早々紛冗中亂筆御免可被下候以上

又八月廿二日

大久保 一 藏

小河彌右衛門様

拜復

【解説】此ノ書利通カ久光公ニ扈隨シテ京都ヨリ歸藩ノ途ニ就ク前日小河一敏ノ來書ニ答ヘタルモノナリ一敏ハ寺田屋事變後薩藩ノ厚遇ヲ受ケ當時寺町通大雲院内超勝院ニ假寓シテ薩藩ノ庇護ヲ受ケツ、アリシカ歸國ノ際久光公ノ盡力ニ依リ一敏等カ久光公ニ隨從シテ國事ニ鞅掌セシコトヲ叡感アラセラ
ル、旨ノ御沙汰書ヲ賜ヒタルナリ

二五 吉祥院への書翰 文久二年閏八月廿九日

(大久保家藏)

【按】歸藩ノ途兵庫ヨリ吉祥院ノ書ニ答ヘタルナリ

御別後御安泰被成御座奉恐賀候次ニ乍恐

上様益御機嫌克昨廿八日兵庫へ被遊

御光着今朝

御乗舟之筈ニ御座候彼是御都合も宜敷御同慶奉存候扱出立之節も混雜故
寛々御嘶等も得不申上甚以不本意之至何共無申譯御高免可被下候段々御
送り物等被成下別る難有御禮申上候且又御書取之趣委曲承知仕候則御世
話申上取究何分申上度候へ共何分ニも大坂三日之御滞在ニ付大混雜中逆
も御都合六の鋪御坐候間何之筋御國御着之上早便より申上越候様可致
候間左様御含可被下候御國元より何分申上越候迄之御滞京相成候ももさ
し支無之其段ハ帶刀殿迄内々申上置候御内願之筋之御尤ニ速ニ相運ひ
可申事ニ候へ共御存之通之
御多用中故其邊迄ハ十分と、き兼申候次第不惡御汲取可被下候先ハ貴答

迄早々如此既ニ御立前故取込何も委曲得不申上候何之御國元着之上早便
より有無可申上候間其内之何となく御滞京ニ亦宜鋪御坐候本田へ内々談
置候間御懸念被成ましく候謹言

又月廿九日

大久保一藏

吉祥院様

【解説】利通ハ久光公ニ随ツテ是月廿三日京都ヲ發シ廿八日兵
庫ニ着シ翌日乗船前ニ本書ヲ認メタルモノニテ吉祥院ヨリノ
書ハ内容不明ナルモ在京中歸藩ノコトニツキ斡旋ヲ乞ヒタル
モノナランカ吉祥院ハ税所篤ノ兄ニテ夙ニ利通父子ト親交ア
リタルナリ

二六 有村幸藏への書翰

文久二年九月廿八日

【按】櫻島温泉入湯中ノ有村へ老母入湯ニツキ宿ノ手當ヲ依頼

シタルナリ

秋冷相募申候處愈以御安康御入湯御出精御相應之筈奉賀壽候扱自由至奉
存候得共粗御頼申上置候通母事明廿九日天氣次第其地に參候賦御座候
付何卒宿手當被成置被下候様奉願候未御約束不被下候ハ、彦作与申者所
兼而知人ニ而候付御相談被下度之し時分柄差支居可申りと相察申候左
候ハ、とニあるく明き居候處ニ而宜鋪御坐候尤人數に六七人ニ而御坐候餘
自由之義奉存候得共此段御願申上候本田氏おとさまモおとしまり被成
候由明日迄ハ如何可有之候哉先と用事まで早々

九月二十八日

大久保 一 藏

有村 幸 藏様

追而小生ニも一兩日共と都合次第見舞ひてら參り候もつニ御坐候

【解説】利通ハ是月七日京都ヨリ歸藩シ久々振兩親ニ近侍シ老
母ニ病後ノ湯治靜養ヲ勸メ己レモ後ヨリ往キテ老母ヲ慰メン
トシタルナリ「本田おとさま」ハ親雄ノ老母ヲ云ヒ「おとしまり」ハ

方言湯治行ヲ果スノ意味ナリ幸藏ハ海江田信義ノ弟ニテ後ノ
國彦ナリ彦作ハ櫻島有村ノ農大久保家ニ親シキ者ナリ利通ノ
一家ハ前年父次右衛門遠島中窮乏ヲ極メ母モ具サニ辛酸ヲ嘗
メ爾來健康常ナラス利通モ殊更孝養ヲ盡シテ至ラサルナカリ
シカ今ヤ利通ハ久光公ノ信任日ニ厚ク是年五月二十日御小納
戸ニ進ミ此月三十日御用取次見習ニ任セラレ破格ノ寵遇ニ浴
セシカハ兩親モ歡喜斜ナラス往年ノ不幸ヲ慰メ只管其前途ヲ
樂シミタリ尚ホ是年久光公ニ隨從シ江戸ニ在リタル利通へ父
ヨリ贈リシ家信アリ

【參考】父次右衛門より一藏への書翰 文久二年六月廿九日

(大久保家藏)

尚々家來下人共皆々元氣ニ御坐候半宜敷御傳可被下武助宿許皆
々元氣折々消息有之候善太ハ未下着無之候不埒千萬行狀ニ御坐
候

今日飛脚被差立候付一筆致啓達候炎暑甚敷御坐候得共
三郎様益御機嫌能去月七日高輪御屋敷へ被爲遊

御安着次ニ御事ニモ大元氣ニ首尾能被致御供候段書狀先々致安心
候於爰許小生始家内中大無事流行中痲疹皆々相濟頓ト安心イタシ滿
壽トノニハ相應之煩ニ兩日妄語ニテ御坐候得共最早全快ニ伸房
乳一時ニ引(燒損)彦熊母ト下女小二才一所(燒損)下女小二才ハ罷歸リ
申候ハ、トノ大心配ニ御坐候得共當分ハ物笑ト相成仕合ノ事ニ候
最早御當地ハ殘少ニ罷成田舎ニ最中ト被聞申候當時(燒損)跡下リニ
市の中抔死人多御坐候武士ハ相少ク御坐候石原氏モ峯母輕ク相仕舞
申候山田氏モ同斷相濟申候類中何方モ無殘首尾能相濟申候可被致安
心候

一遠州濱松駿州鞠子驛ヨリ追々書狀相届致披見候梅雨中川々御支モ
無之珍敷御都合ニ御坐候殊ニ晴富士山被致一覽殊ニ梅雨中拘ラス

俗云御縁ニ御坐候半ト存候爰許珍敷事モ無之評判取々ニ御坐候
由ニ被聞申候

一石原直州ニモ安着ニ書狀彦熊抔下拙ニモ品々送り(燒損)給候宜敷
御傳言可給候

一最早盆祭近寄七夕ト何ノト色々世話敷事ニ遠察可給候其地此節
ニ御供ニ付華洛關東道中心配而已ニ實ニ火宅中之(燒損)屋ニニ
當分ハ少し遍(燒損)玉トアサムク閑モ御坐候半ト致遠察候尙追々被
致配慮是ヨリハ天下太平御計策モ可有之殊ニ將軍當秋可被致
參内ノ段未年 英斷實ニ天下ノ幸ニ候越公毎日登城ノ由彼是好時
節誠ニ當分ニ天下和合ノ時節到來徳川ノ運氣未地ニ落不申候又
高(燒損)上リ候ニ付(燒損)年百年モ續キ可申當節ノ機會ハ實ニ乍恐
三郎様御英斷ヨリ事始第一關ヲ破リ被遊候ノ大功ハ御家ニモ難
有御事御坐候是ヨリ追々咄モ出(燒損)外方ノ評判取々可有御坐候天

下ノ形勢承度實ニ老後ノ思出ニ候御遠察可給候

一御方昇進ノ祝ヒモ(燒損)致候間何レバ、カ忌明ノ上家内中快氣祝相混シ(燒損)内々申談置申候當分何方モ麻疹中ニ亦申遣候亦罷出候人少ク御坐候イツレ益過候亦ノ事ニ御坐候

一煙草五卷

右ニ煙草入之外(燒損)給候ニ付御懷ヨリ是非何カ御坐(燒損)可被遣トノ事ニ亦乍輕少進シ候付賞味可給候實ニ老母之志ニ亦候外ニ同斷一包是モ御懷之志ニ御坐候ニ付右之趣ニ亦先方へ御届可被下候先々右一左右マテアラ、メテタクカシク

六月廿九日

次右 衛門

福 升

彦熊 伸熊

一 藏殿

【解説】福ハ利通ノ母升ハ利通ノ妻彦熊ハ後ノ利和伸熊ハ牧野伸顯ナリ

二七 岸良七之丞への書翰 文久二年十月八日

(大久保家藏)

【按】役職昇進ニツキ祝ヒ物ヲ贈ラレシヲ謝シ猶ホ伊地知貞馨安着ノ祝ヒ物ヲ贈リタルナリ

尙々段々御嘶申上度候得共之、御直談おらて難申盡候

近々之内御出被下候得て仕合奉存候晩ニ格別客來も少く御座候

追日寒冷相催候處彌御安靜被成御座珍重ニ至奉存候私事も先日案内

奉命難有仕合奉存候就るも美事之御看御祝被下忝御禮申上候將亦堀君

も御安着之由御安堵之筈奉存候長々之舟中嘸々御退屈之筈親察仕候宜鋪

御傳置被下度奉願候隨亦些少之至奉存候へとも肴一折御着之御祝詞迄懸

御目候間御笑留被下候へも多幸奉存候此旨貴様迄早々得御意候以上

十月八日

追亦御禮のさく鳥渡參上仕度候得共其後始終遲退出かさくニ亦
其儀不相叶候間何卒御憐察可被下候

岸良七之丞様

大久保 一藏

上置

【解説】岸良ハ兼養時ニ御小納戸タリ利通ハ前月晦日御小納戸
頭取ヨリ御用取次見習ト爲ルコノ役ハ藩ノ重職御側役ニ進ム
楷梯ニテ異數ノ拔擢タリシナリ書中ノ堀君ハ小太郎ヲ云フ

二八 藤井良節への書翰 文久二年十月十三日

(藤井家藏)

【按】在京ノ藤井ニ答書シ時局ノ推移ヲ觀察シ猶ホ朝廷及ヒ幕
府ノ事情ヲ問合セタルナリ

尙乍紙端青蓮公御一條相運ひ候段別亦御安心ニ候三條もおのつゝら
御運ひ相成候半

定式飛脚便よ御細翰之趣逐一致承達則

御覽ニも備置候其御元も格別相變候向も無之矣のし長土種々周旋之模様
何も結構之御事ニ奉存候其後如何之都合ニ御坐候哉比日幕勢案外之決斷
上洛も來二月ニ被仰出候由是以無上之好事乍恐
至尊之

御安堵嘸々ト奉雀躍候就亦と言外之勢も有之事よて容易難申候得共時世
ニ應し大小寬急之處置千古不朽之治體屹度相居候義如何ニ可有之哉近
來關東も開鎖之論一定せず紛々擾々兩立之勢ニ末可相成模様ニ候由既ニ
長州へ攘夷之

勅も相下り候ニ就亦是非其實不被相行候亦不相濟御事ニ御坐候處若
右邊之處ニ混雜生し候ものニ有之ましく歟上洛之事も眼前大敵を養ひ
なから空虚ニかし候てハ如何ニ可有之歟尊

王之一大急務ニ可有之候へ共旁遠察のミよても愚眼ニ難及御坐候何卒
委曲之事情御洩漏可被下候

一 今大路一條其外御話申上置候件々委細御申越御安心相成候左様御納得可有之候

一文吉一條如何之始末ニ御坐候哉多しゐらざる趣ニ相見得萬一實事ニ候ヘモ只々相濟兼候譯ニ相察申候

一 御參觀一條未御日限御究之無御座候實情ハ帶刀殿より御承知之筈与相省申候

右概略御用命相受早々如此御坐候尙追々之御左右奉待候勿々敬白

十月十三日

大久保 一 藏

藤井 良 節 様

【解説】書中ノ長士ハ長藩主毛利敬親ト土藩主山内豊範ヲ云フ兩侯ハ當時京都ニ在リテ攘夷ヲ主張シ朝廷ノ爲ニ斡旋スル所アリタルナリ上洛云々ハ將軍ノ上洛ニテ九月七日發令アリコレ幕府カ朝命ヲ遵奉シタルモノナルヲ以テ利通ハ大ニ之ヲ悅

ヒタルナリ「關東も開鎖の論」云々當時幕府ニ於テハ開國論者ト鎖港論者アリテ議一致セス一方朝廷ニ於テハ長藩へ攘夷ノ勅ヲ下セシヲ以テ利通ハコレ等ノ實情ヲ觀察シ時局ノ紛糾スヘキヲ以テシ將軍ノ上洛ヲ氣遣ヒタルナリ「今大路一條」ハ不明「文吉」ハ目明シ文吉ニテ閏八月廿九日浪士ノ爲ニ殺サル「參觀一條」云々藩主忠義公參觀ノ期ニ達セシモ出發ノ期未タ決定セサルヲ云フ帶刀ハ家老小松清廉ニテ是ヨリ先出府ノ命ヲ受ケ上京シタルナリ尙々書ノ「青蓮公」ハ尊融法親王後ノ久邇宮朝彥親王ニテ曩ニ久光公ノ建言ニヨリ還俗アリ九月三日政事參與ヲ命セラレタルナリ

二九 小松帶刀への書翰

文久二年十月廿九日

(寺前次兵衛氏藏)

【按】朝廷ヨリ久光公へ召命ノコト齊彬公へ御贈官ノコト并ニ藩地ノ近狀等ヲ在江戸ノ家老小松清廉ニ報シタルモノナリ

尙々追々嚴寒ニ相向可申付折角尊體御保護專要奉祈上候

一筆奉拜啓候追日寒氣相向候處於御當地乍恐

御兩殿様益御機嫌克被爲遊御坐恐悅御同慶奉存上候其御地

御姫様方被爲揃御機嫌克被遊御坐奉大慶候次ニ尊公様御道中無恙御安

着益御機嫌克被遊御精務恐悅奉存上候隨ち私無異連勤仕候間乍恐易尊意

思召可被下候

一京師々々尊翰難有拜見仕候彼御地御都合も十分之御首尾ニ御出立之

由詳悉被仰下私共ニ至リ別ち難有奉存上候此節ニ行クとして御難問

からさるハ無之扱其御元之御都合如何ニ御坐候哉既ニ

御姫様方芝御邸へ

御移徙之御日限も御究了之由ニ付ち尙以御六ヶ舗候半御參府御猶豫

之御一條も被爲在次ニ

御女性様之御事候得ハ諸事運ひ兼候事比ニ候半併もふハ何之方ニ

も御治定相成候筈与折角御左右奉待候時宜ニ依ちハ早

御道中歟も難奉圖態与御中途ニ振向ケ此一書奉拜呈候

一藤井良節も早目着よて則被差立申候此一條ニ付ちハ誠ニ

叡慮之程不容易

三郎様御冥加ち勿論千載之下御家之御美目前代未聞之御儀ニ御坐候

兎角此ニ至らば彼是不可相濟奉存居候此節

御上洛之處ハ實以一大重事ニ治亂相隣候御場合ニ付ちハ

三郎様御上洛ニ大尾ヲ御成就ニ其上

太守様

御出駕被爲在候方萬全之御策与乍恐奉存候此節ニ直様取物も不取敢

御上洛被爲在御相當之御義ニ被爲

思召候得共幸一橋公上洛も別

勅使被差立ニ付御延引被仰出候得ハ先ッ御急キも被爲及間舗且御國

之義も何も御手附候央之事殊ニ

太守様

御參府被 仰出候得ハ

御兩殿様共 御迦ハ迎も不被爲叶候間藤井を以無御異儀御請々被仰上

少々寛急之處細大御内情 御認 御直書ヲ以

關白様ヨ 御陳述御都合御願被進候就ルハ何也

太守様 御參府 御差留ニ別段ニ

叡慮を以

三郎様 御上洛ニ

勅命を下さむ候御趣

大樹家の表向御當之ニ 御手数相運ヒ不申候ルハ御都合不宜其筋藤井

相合早々上京いさし候付此義ハ神速運ヒ付可申候左候也

一橋公上洛日限決定ニ一左右を期よして此御方ハ 御駕ヲ促され候御

内決ニ御坐候兎角ニ正月ハ

御發駕之御都合可相成可被爲 仰越候通三月將軍上洛ト被 仰出候義

内分 御願ニ相成候間其通運ヒ候得ト旁御都合無此上奉存上候其邊御

差合諸事 御盡力奉伏願候

一別

勅使愈去十二日

御出立之由追々 御下向相成可申此一條ハ誠ニ難問ニ可有御坐畢竟

長土ニ建白よ

朝議 御決定相成候由勢ひいさし方無御坐候此上ト

勅意通不被行候也ト不相濟譯ニ御坐候得共多分一橋公上洛之上可奉及

勅答与出テそふ御坐候志るを愈以

勅使ハ無用之者ニ相成可申候何分一左右承度事ニ御坐候

一乍恐

順聖公

御贈官一條も愈被

仰出候段昨日京師方飛脚着よて殊ニ

御書付之御趣

御在世中之 御忠誠ヲ

御褒賞よて

御臨終ニ實弟三郎の遺託云々ト有之實ニ奉拜見頭も上り候丈ニ無之落

涙數行感嘆交至リ一言も有之丈ニ無御坐此ニ至リ

先君 御威烈赫々

三郎様之 御功勳明著幾重ニも難有次第御坐候就るも偏ニ御盡力ヲ以

神速相運ひ萬々奉厚謝候乍恐

御兩殿様被爲揃

御拜覽之處

御満足ハ無申迄

尊顔ニ 御涙ヲ垂させ給ひ何与奉申上様も無御坐候御遠察可被遊候最

早其御地へ相達候筈ニ御坐候

一御當地之事も禦海之術水軍兵士其餘兩館文武磨勵之道ヲ以究士御救助

之道集成館琉球通室 田中七右衛門屋鋪并凡御取入相成折角御造立中央ニ御坐候大抵相運可申

市中諸色一條 米價沸騰諸色ハ尙以テ之常平倉二千石ヲ開らせ玉ひ下直ニ申受被仰付米價ヲ下クられ候追々下直ニ相向人氣悦服之形ニ御坐候

銅山取起一條 國分阿久根等御手相付候 其外段々御手被召付候何分御案内通無人ニ亦

御趣意之十分一も下ニ充實不致實ニ臣子之重罪歎息無此上私共第一其

責ヲ不免頓与申譯無御坐候併愚一盃丈ハ無申迄相盡非常之

大恩萬分之一を奉報微志ニ罷在候ケ成ニ御用ひ相成度人も有之事候得

共寬急其時ヲ不得候而も返而不宜譯も有之候半兎角當分之處よてハ攝

老おくてハ相濟不申候其外細大之事件奉申上度候得共昏筆ニ難盡國事

内外多事之次第ハ御遠察可被下候

一日々幕變革先月十五日御返拜見候次第与程之決斷殊ニ越公振こまじ不
容易由誠ニ結構之次第御坐候
尊公様御拜謁ハ如何之御都合ニ被爲在候や其後之形行奉承知度此ニ至
と

三郎様之御功勳益相輝キ難有次第御座候

右伺御機嫌且御一左右奉申上度荒々如此御坐候恐惶謹言

十月廿九日

大久保 一 藏

小松 帶 刀様

御近習衆

【解説】當時朝廷ニ於テハ三條實美等勢力ヲ得形勢一變シ遂ニ
攘夷ノ決行ヲ幕府ニ促ス爲ニ大原勅使歸京ト前後シテ實美及
ヒ姉小路少將更ニ勅使ト爲リ東下スルニ至ル因リテ近衛關白

ハ大ニ之ヲ憂慮セシカ會々久光公ヲ召スノ宸翰ヲ關白ニ賜ヒ
シヲ以テ關白ハ藤井良節ヲシテ宸翰ノ寫ヲ齎ラシ歸藩セシメ
召命ニ應スヘキヲ促シタルナリ小松ノ江戸ニ使セシハ忠義公
參觀ノ猶豫願ト江戸藩邸在住ノ姫君ヲ迎フル爲メナリ藤井良
節ハ元井上出雲ト稱シ鹿兒嶋城下諏訪神社ノ祠官嘉永三年高
崎騷動(齊彬公繼嗣問題)ニ關係セシカ筑前黒田齊溥公ニ救ハレ
後京都ニ出テ、近衛家ニ仕ヘ夙ニ公卿ノ間ニ識ラル常平倉ハ
齊彬公ノ創設ニ係ル尙ホ次ニ掲クル別啓書翰中ノ伏見一條人
數云々ハ本春寺田屋事件ニ罪ヲ得シ藩士ハ利通等ノ盡力ニ依
リ悉ク皆赦免セラレ且ツ諸役向モ一同復舊ノ恩典ニ浴シタル
ヲ以テ大ニ喜ヒタルナリ

三〇 小松帶刀への別啓書翰 文久二年十月廿九日

(大久保家藏)

別 啓

一 伏見一條人數も別段之に以思召御赦免被 仰付候上勤方も本之通無御構
 与被 仰出一同再活之奉蒙恩私共ニ至リ難有存候まして當人共ニ至リ
 感泣無他事由ニ御坐候
 一 岸良も御小納戸見習被 仰付難有次第ニ御坐候堀も能キ向ニ運ヒ可申
 御内慮に被爲在候
 右之御禮奉申上候謹言

十月廿九日

一 藏

帶 刀 様

尊下

三一 桂右衛門への書翰 文久二年十一月十六日

【按】三條勅使東下ニツキ時局ノ推移ヲ考察シテ桂ニ報シタル
 ナリ

別番一昨夜仕出候賦よて認置候得共御用封今晚ニ延引其まゝ差上申候付

御推讀可被下候委曲申上度候得共早朝より夜ニ懸色々多忙其儀相叶不申
 何も期拜接候以上

十一月十六日

一 藏

桂 様

別紙

京師御勢日々盛大相振ひ轉法輪三條様

勅使御下向姉小路様副使に差立斷然攘夷之義奉行相成候様与之

御趣意ニ畢竟長州土州合體よて建議之處々全躰之

叡慮ニ被爲 在候得て自然朝議右ニ御決定之御儀ニも可有之候得共此
 一條ニ就て實ニ

皇國之重事ニ眼前之勢ハ御轉移被爲 在候様よてハ甚不可然御事
 ニ亦只今之處大變革之始復古之大業成否之際ニ相關リ候機ニ御坐候得
 て克々始終之見居被爲立事之利害得失人心之向背去同を洞察し永世不

朽之治體屹度相居之候儀肝要御坐候處時世ニ應し大小輕重取捨之御處置ニ暗ク前後顛倒之差寸分有之候ハ實ニ治亂之大事ニ相懸リ候半於關東も十分奉

勅之淺深も相見得既ニ來二月上 洛御發ニ相成候得之廟議之深意も可有之尤列藩も開鎖之論紛々終ニ兩立之勢ひも相見得末如何と懸念之廉も有之折柄

勅使被差立候上ハ是非其實不被行候之不相濟譯ニ候之旁彼是之勢ひ細詳熟察いさし候得之返一混雜を醸し候機ト相成

御趣意反覆之憂到來案中ニ御座候故ニ

三郎様云々御建議被遊置候御事ニ有之形勢を以て之ハ攘夷之論ハ安ク候得共現事を以て之ハ前條之憂不一方只趣意ハ同ふして寬急之違有る迄之事ニ候就之來二月上 洛之上親鋪被

仰出候之御至當之譯ニ可有御坐候間篤と被及勘考建議被爲在度

御趣意ニ於之ハ今更

御變リ不被爲

在候間右之趣起之建白ニハ不及候得共若

御尋も被爲 在候ハ、前條之趣ニ付被及言上候様

御沙汰ニ候

三二 中山中左衛門に贈る書 文久二年十二月二十一日

【按】利通カ京師ニ於テ近衛關白及ヒ青蓮院宮ニ伺候シ久光公ノ意見ヲ具申セシ經過ヲ御側役中山宛ニ報告セシモノナリ

一昨夜陽明家參殿

御父子様御揃ニ御目見被仰付則御直書差上候處篤与御覽被爲在候ニ付尙亦奉承知候御趣意之程奉言上候處

御兩殿様如何ニも御尤之御趣意と一同ニ御感賞被爲在候就之乍恐御同

意ニ被爲思食候ハ、

宮様御談合之上全ク衆評ニ涉らむ御兩人様切リニ被爲纏奏聞眞之
叡慮与申處ニ断然御發し相成度無左候ハ 三郎殿より建議ニ此
ニ及候譯洩漏いし候而決る異説ヲ起し候而已ナラス却る害ヲ引候
事も難測候得と吳々も御趣意ニ歸し候様御周旋奉願候様被申付候段申
上候御尤ニ思食候玄るし眞之
叡慮与申しても必む其所起を人々疑惑いし候と案中ニ何分難問ニ
候間

宮様此御書御覽被爲在候上委曲之御趣意其方より及言上候而正親町迄
形行承候様無之候ハ何分御周旋遊はし兼らむ候間明朝

宮之御方ハ其方罷出候而正親町にも參リ吳を候様左候ハ、今晚此御書
ヲ

宮之御方ハ相廻候様可致与之御事ニ御座候其通御請仕退出

一今朝 宮様ハ罷出候處殊之外

三郎様御趣意ニ御感服ニ御沙汰被爲在候ハ夜前及深更 殿下より

三郎殿書狀御差廻相成篤与熟覽いし尙今朝迄再三披見いたし候處實
ニ至當之議論令感服候兎角ニ此通不被行候而決して不相濟義ニ被存

候依而正親町にも云々御傳言共被爲在且殿下にも分る御委任ニ御周
旋被爲在候様申上候得共種々被仰付正親町亦々

殿下にも今日罷出候克々御請込ミ相成候何分ニも

殿下頓与御寸暇ヲ得させ給はむ廿三日迄ハ御神事ニ付

宮様ハ御出与申事も不被爲叶今日も終日之御客來中々御多端与被伺候
明朝御參掛

宮様ハ正親町御出ニ御談判被爲在賦宮招より左候而正親町ハ禁中ニ
而

殿下御打合被爲在筈ニ御坐候何れ一人ハ御引合無之候ハ

殿下御一人ニハ御周旋六ヶ敷被思食候處より正三を御取込之御策ニ御坐候何分其方ニも急キ之筈ニ候得共廿四日迄ハ見合居吳候様

殿下より御沙汰ニ御座候ニ付兩日中ニハ御決議可相成与奉存候只依頼
せる處ハ

宮之深ク御趣意ニ服せさせらる是非々々与之思食ニ正三の御傳言内々萬一此義ニ異論を起し候者有之候ハ、屹度被仰出候様有之度与之御一言有之實ニ難有次第御座候

一 御上言之義

殿下より則御尋被爲在候ニ付二月中旬ニハ着京与申處ニ申上置候只今之處ニハ其邊ハ次ニ相成何也此御建白

御朝決相成候處急務ニ別段分御沙汰も不被爲在候何也有無相決候上尙亦委曲可奉申上候何也二月初旬阿久根より御乗船与申處ニ候得之如何様ニも御差支被爲在ましく与奉存候

一 何分相決次第關東の駈下リ不申候也不相叶都合与奉存候

一 一橋下坂相發候由ニ御坐候是ハ攝海の英船乗入候説有之候ニ付閣老小笠原外國奉行等と一列ニ出立之由ニ御坐候二條城の滞在守衛与申場

ニハ臺場其外海防手當有之筋ニ被聞正月二日比一橋ハ着坂外國奉行ハ

蒸汽船ニハ參るトノ説も有之候時機ニ依ルハ上言も可有之与事ニ候由候得ハ全ク英船一條之事与被伺申候尙追分リ次第委事可申上候

一 攝老未着京無御坐候得共もふ大坂迄ハ着舟之筈与待入申候

一 帶刀殿高崎猪太郎下之關ニハ不圖も行逢關東形行も委曲承リ越土益盡力之次第實ニ大幸之次第ニ御坐候此節ハ愈

三郎様の依頼之實顯を御書も參候由と云く此ニ至リ不申候ハ不相濟義与奉存候自ラ疾ニ永平丸着舟ニハ實事御承知之筈与奉存候ニ付別段不申上候

一 越土之處も正月七日方ト申事も未定ハ分り兼申候高崎立後一橋也

と之事有之亦一變之姿ニ相見得申候

一勅使明後廿三日 御着京之賦因州公ハ兩日跡着京相成申候

一鍋島ハ廿日ニ出府相成申候餘程邪魔いさし候由追申上候其外追々大

小名之上京數るニ暇あらは候

右何を決定之譯も無之奉申上程之義ニも無御座候得共加藤十兵衛町

飛脚差立候段承候ニ付今日之形行爲御心得概略申上候ニ付以御都合被

達 御聽候義宜鋪御頼申上候只今着いさし候儘ニ別混雜中極亂筆

疎文御推讀可被下候以上

十二月廿一日

大久保 一 藏

中山中左衛門様

【解説】是ノ時ニ當リ京師ニ於テハ攘夷黨益勢力ヲ振ヒ明春將

軍ノ上洛ヲ期トシ一大變動ヲ起サントスルノ形勢アリ久光公

ハ過激ノ攘夷黨カ國事ヲ誤ルヘキヲ憂ヒ且ツ將軍ノ上洛ハ其

ノ時期ニ非スト爲シ利通ヲシテ此ノ議ヲ京都及ヒ關東ノ間ニ
遊説セシム利通ハ乃チ公ノ意見書ヲ携ヘテ是ノ月九日鹿兒島
ヲ發シ二十日京師ニ着スルヤ直ニ近衛家及ヒ青蓮院宮ニ伺候
シタルナリ書中攝老ハ家老喜入攝津久高越ハ松平慶永(春嶽)土
ハ山内豊信(容堂)高崎猪太郎ハ後ノ男爵五六鍋島ハ前佐賀藩主
鍋島直正(閑叟)ヲ云フ本書ハ入京ノ翌日好便アリシヲ以テ取り
敢ヘス近狀ヲ藩廳ニ報シタルモノナリ

三三 中山中左衛門への書翰 文久二年十二月廿五日 (公露島津忠承君藏)

【按】此ノ書ハ二十一日附報告書發送後ノ情况ヲ藩ニ報告シタ

ルモノナリ

去ル廿一日昨廿四日町飛脚ヲ以申上越候通着即晚

陽明家

御兩殿様 御目見被仰付翌廿一日

宮様御同様ニ御篤与 御直書被遊 御熟覽候上尙亦 御趣意之程及言上候處至御感伏被遊何此通不被行候不亦不相濟与之御事ニ御坐候尤關白様

宮様限リニ外へ御洩漏不被爲在眞之

叡慮与申處ニ 御發シ相成候様与之趣モ言上仕候處至極御尤ニ被

思食第一

宮様左様ならて不相濟与深ク御吞込ミ被下候得共乍恐

殿下御一人ニ不亦 御英斷御六ヶ敷處より中山正三兩卿御承知無之候不

ハ迎も運ひるね候ニ付是非申入吳候様切ニ奉承知無據處より

宮様も其通被遊 御同意終ニ相洩し候筋ニ御決定

廿二日

禁中ニ兩卿御談判有之翌廿三日

殿下兩卿

宮へ御會議ニ御評決被爲在候良節私ニ罷出候様被仰付大抵御話し被爲濟候頃被爲召罷出候處

殿下

宮より

御沙汰被爲 在候御建白之御趣意ニおひてハ至當之御議論ニ候得共何分此ニ至リ人心之折合如何与是のミ被遊

御配慮候云々亦中山正三より上洛一條ニ付不亦本長州より盡力之譯ニ候得不亦若御延引相成候不亦大ニ失望可致依不亦是ヲ慰むる之道不相立候不亦相濟ましく与之儀も有之其外種々御難問相立不亦らハ良節私ハ長州ハ大議論相立彼ヲ屈服せしめ候ハ、如何与及建白候處彼ヲ屈服サへいさし候得ハ少も御差支無之由御事ニ既ニ其通決定之賦ニ候得共尙亦退不亦愚考候處右様手數相成候得不亦中々一兩日ニきまじ候義六ヶ敷殊ニ越土出足正月七日方ト申候得ハ時日を失し候故何を之筋越土發足延引相成候處專

要相考一先越土に存慮御尋有之彼を異存無之難有

叡慮ニ付早々被仰出度与之譯ニ候ハ、其時ニ

御發し相成候ハ、如何与申上候處至極尤ニ被思食直ニ御決議相成候依

不

關白様 御直書ヲ奉し私急キ今日出府之都合ニ罷成候 御直書之趣ハ今

度

勅使上京復命ニ關東之形勢具ニ達

叡聞候處別段

勅意之御趣有之委曲之次第ハ薩州家臣大久保一藏に被

仰合被差下候ニ付篤与存慮可申上左候御用往復迄之間ハ發足延引い

し候様与之趣ニ容堂公越前公に御宛之御書ニ御坐候就る右之御答

ニ依リ 御趣意通成ト不成ト之際ニ關係いし實ニ重大之任ニ有之恐懼

至極過分之至ニ候得共出府之上兩公に演說之次第ハ臨機應變周旋仕度實

ニ奉命之上ハ 御趣意ニ不致乖戾大事ニ害おきやふ微軀之一盃屹度其詮
相立候様盡力仕候合ニ御坐候篤与熟考仕候得ハ是程條理相立昭然明著之
御趣意眞實
皇國之御爲を思フ忠誠之越土おきハ如何ぞ感動承伏致さる譯無之被存
候

一長州ヲ慰せらむ候一條ハ相模守容堂閣老上席政事關係いし候様御建

白ニ付大膳大夫其列に被召加候

叡慮ニ候段

御内諭有之候ハ、迎も御請ハ致ましく左候ハ、其

叡意を難有可存与之御説かと有之誠ニ餘計之御心配不堪感候是非相模

守容堂公丈ヶノ處ハ此節相運ひ候様盡シ度候得共右通御説かと生し候

間先ツ上京御延引之條ヲ急ニし差扣申候えりし是ハ

三郎様御趣意ヲ以周旋いし候ハ、於關東隨分相運ひ候譯おとも存申

候

一三郎様御發 駕之儀 御尋有之候ニ付御内情無殘處言上且英舶之一條も申上其上第一之 御趣意ハ如此大任を奉蒙候上ハ上京いし奉安 叡慮候廉無之候而夫不相濟候ニ付篤与深謀熟圖いし候處只今より終始之定策相立云々言上仕候譯ニ御坐候此策不被行候得夫迎も上京いし候而も其詮無之ハ案中無詮ニ上京いし甚無用与 三郎之所存ニ何分

朝廷 御評議之趣早々注進いし候様吳々申付置候ニ付申越次第ニ發足之比合も取窮可申事与存候段且亦不容易重命奉蒙色々内情申立候ハ如何与 思食も難奉圖候得共全ク自國之爲メニ申立候譯ニ無之何と攘夷之

勅意奉貫徹候得夫守禦之術行届何時變を引候而も屹度應し候様無之候而ハ其職不相立候ニ付一國丈ケニ而も其實相叶候様与之趣意ニ御坐候

當時大小名勤

王を唱へ連日上京類ニ乞 命候義實ニ尊

王之道天下ニ行を無此上美事

朝威も相立候様ニ御坐候得共三郎ニ夫却而奉懸念候譯ニ御坐候故ハ勤王を唱へ候内ニも眞實忠誠之志を以盡し候も可有之候得共亦如此機を幸ニし私を先キニし勤

王を餌ニいし候も無キニも非らずと存候左様之邊より私ニ争を以寸毛之事端より内變を生し候義所謂元弘之覆轍之如キ克々鑑ミ給はずんハ一大事ニ御坐候三郎一國を處置して益思當り候ハ只今萬々一異船渡來いし候ハ、十分之勝利中々無覺束去りとして攘夷被 仰出候上ハ自國を惜む譯ニハ無之候得共一國之瑕瑾ハ

皇國之瑕瑾ニ有之其瑕瑾ヲ受ケざるやふ國本相固め候ト申ハ不容易至難之義ニ御坐候然るニ當時自國之警衛を次ニし夜を日ニ上京いし候

大小名外ニ如何之見留有之事ニ候哉眞實

皇國之御爲も存候忠膽ニ候や心腑ニ落ち不申候是三郎自國之爲を思ふ
之内情を申立るニ無之譯ニ御坐候段種々御答申上候處御一同如何ニも
御尤ニ被 思食候旨

御沙汰被爲在候現在鍋島滯京中實以暴論ニて畢竟長崎之固を遁を候た
め伏見桃山警衛被仰付左候而余人を交候而夫不相成一藩は被仰付候様
申立且又三藩々々ト騒々敷申候得共役立候事ニ無之其證據ハ私ハ足輕
四十五人を以勝負被仰付候ハ、則打伏セ可申或ハ越前など未何とも知
れ不申私出府之上養育可致なとト暴言之數を盡

陽明家ハ押懸參殿などいさしあくとミはて被成し筋ニ被聞漸々參

内被仰付於關東請命候様御達ニ出府之都合ニ相成候由の様之義も有
之候故与程徹底いさし候御模様ニ御坐候

一別紙サセラサル書附あるら鍋島より差出候書附

朝廷ヨリ御達之

御書附差上候右牀之兇賊たり共參

内被 仰付且不容易

御書附振姑息之 御處置殘懷不少只々腸を斷ち候次第ニ御坐候出府之

上ハ屹度手を盡し候含ニ御坐候

一私上京之事ニ候由

朝廷ハ國事掛ト申者出來別紙之通御人數ニ三三日ニ一度御會議有之事
之由其内ニ大原卿迄も列リ誠ニ大變ナ次第ニ御坐候朝議之一定ならさ
る是を以推知せらる候大原ハ殿下之ナシ給フ處与被聞申候今少し寸暇
も御坐候得と議論も立度候得共夫所ニても無之致方無御坐候

一勅使三條公廿三日上京復 命別紙

勅答書差上候別段之說ハ不承候

一因州も上京會津も昨廿四日上京土長も近々上京与被聞申候其外滯京之

大名數ヲ知ラス就テ愚考ニ上洛
御延引被 仰出候日ニモ滯京ニ大名も自國警衛守禦專要ニテ候間各應
召上京之志

寂感被 思食候得共當時ニ至リ候テ攘夷ニ
勅意尊奉第一ニ候付御暇被下候間早々歸國必至ニ磨勵いし様 御達
且關東にも其趣ヲ以天下へ令し候様被 仰出可然存候間其段も 御趣
意ト申處ニ建白いし候處御尤ニ被思食候与ニ御事ニ御坐候其節ニ
相成候ハ、是非其通ニ不相成候ハ只今通ニ實以大事々々詰リ不
申候右之形行急飛脚ヲ以御問合申越候間被達
貴間候義可然御取計可被給候尙關東より模様早々申越候様可致候未委
事申越度候得共何分急卒之間認兼候ニ付要用而已如此候以上

十二月廿五日

大久保 一 藏

中山中左衛門殿

【解説】久光公ノ意見ニヨル將軍上洛延期ノ件ハ近衛關白及ヒ
青蓮院宮ハ即時ニ同意セシモ中山正親町三條兩卿ハ長藩ヲ顧
慮シ難色アリシヲ以テ利通ハ更ニ考慮スル所アリ先ツ春嶽容
堂ノ上京ヲ延期セシムルヲ急ト爲シ關白等ノ同意ヲ得是ノ日
關白ノ書ヲ携ヘテ東下シタルナリ此ノ書ニ依レハ利通ハ久光
公上京ノコトニ就キ公ノ心事ヲ詳述シ且ツ刻下勤王諸藩ノ行
動ニ就キ痛論スル所アリシヲ知ルヘシ書中「サセラサル書附」ト
ハ方言肝要ニモナキ書類ノ意ナリ尙ホ下ニ掲クルトコロノ別
啓書翰中守護職云々トアルハ久光公ヲ京都守護職タラシムヘ
シトノ朝命ヲ幕府ニ降サレシカ幕府ハ之ヲ奏請スルヲ欲セス
寂慮ヲ以テ直接達セラルヘキヲ以テシタルカ故ニ事遂ニ中止
スルニ至レリ

三四 中山中左衛門への別啓書翰文久二年十二月廿五日

(公爵島津忠承君藏)

別 啓

一御發駕之義二月初頃ニ被仰出候亦如何可有御坐や

關白様

宮様にも其通申上置候尤蒸汽舟ニ中旬ニモ無相違段申上其通

御納得被爲在候之し御守護職之義

勅使ヲ以御答申上候ハ關東よりハ相違不申候付以

叡慮

朝廷より御達被下度旨申上候由關老連名ヲ以傳奏衆にも其段申參候由

依

御上京次第ニモ 御達相成候ニ付可成早目御上京相成候様

御沙汰御坐候依

以書添申上候已上

十二月廿五日

一 藏

中 左 衛 門 様

三五 中山中左衛門への書翰

文久二年十二月廿五日

(公爵島津忠承君藏)

【按】齊彬公御贈官御禮使勤仕ノコトヲ報シタルナリ

關白様

左大將様

順聖院様 御贈官御禮 御使者勤去ル廿三日別番之通進上物相納首尾克

相濟申候御答之儀追亦被仰下候与之御事ニ御坐候進上物之儀

宰相様三位御昇進之節御使者勤之例取調候處別紙之通誠ニ太粧之御事ニ

亦此節之儀ハ譯合も相替リ候義ト存候間格別減少いさし候得共偶御使者

御差立餘リ御龜末ニ亦も如何と被存候ニ付獨決ヲ以別番通取計申候諸大

夫以下之處ハ餘計とも存候得共御内使者之節といはれも被下候ニ付

御兩殿様御相中よて御祝被下候も可然存候譯ニ御坐候以御都合

御兩殿様奉達

貴聞候義共可然御取計可被給候以上

十二月廿五日

大久保 一 藏

中山中左衛門殿

【解説】是ヨリ先十一月十二日幕府ハ齊彬公ニ權中納言從三位追贈ノ朝旨ヲ薩藩ニ傳達ス依リテ利通ハ廿三日先例ニヨリ御禮ノ爲メ近衛關白父子ニ謁シ物品ヲ進上シタルナリ書中ノ左大將様ハ近衛忠房公宰相様ハ齊興公ヲ云フ別紙ハ之ヲ迭ス

三六 言路洞開ノ達書艸案 文久二年

(大久保家藏)

【按】言路洞開ノコトヲ家老ヨリ達シタル際ノ草案ナリ

上書之儀

順照院様御代被 仰達候得共尙又以來

御爲を存し何事ニよらむ奉言上度面々致封書

御側役は相付可(燒損)右に上下之情意通候

思召ニ被 仰付(燒損)之儀無之實意を以奉言上候様士以上之面々へ可相達候旨被 仰付候此旨不洩様早々可(燒損)

九月

筑後 駿河 但馬

【解説】筑後ハ川上久封駿河ハ新納久仰但馬ハ川上久連共ニ家老ナリ

三七 藩大臣方心得言上書 文久二年

(大久保家藏)

【按】御一門家ノ責務ノ重大ナルヲ説キ文武ヲ砥勵シ遊藝ニ耽ルナキヲ以テシタルナリ

御大臣方之儀往々要路ニ(燒損)御國家之柱石与成(燒損)萬民之上ニ立政事を司治亂興廢之相係る御大任ヲ御荷ひ被成御事候得え平生文武之御修行ニ勿論別々御心ヲ用ヒ御養ひ無之候ハ不相濟事ニ候平生之論ヲ以(燒損)候

得去右様大事之處去我々不及處其節も其時之事ト度外ニ差置候様之事ハ
 小人之云草ニ候是を佳事ト御心得被成候も大なる御間違ニ御座候生亦
 ろら其任ヲ御持被成候得も今日之處其御心得無之候も御家柄相當之御
 職務不被爲調筋ニ可有御座候間晝夜念々右之御大任を無御忘候様信實御
 用心有御座度(燒担)ヲ憂候ことく有之度奉願候右之工夫被爲在候得も自然
 政事之得失人情時變ニ御心を用ひ被成候様可相成候只今之處ニ亦も美を
 好ミ御志ハ随分被相立候得共夫迄ニ亦着實御真志無之夫故始終御遊藝之
 方ニ御流れ被成候義有之候何れ右様御大任ニ御居被成候得去事を執亦
 明敏果斷言行は是人氣も歸伏致候様無之候も不相濟候人氣歸伏言行を
 候去人ニ不被信候も去不相成候人之信を取候義ハ信を取度ト心寸分萌
 候得も則名聞ト申者ニ候間眞實志相立候處返々肝要ニ候然去去行狀之上
 ハ折角御慎ミノ處專要ニ候先々御遊藝之義も無之様有之度候

【解説】御大臣方ハ御身分ノ意ニテ藩主ノ御一門方ヲ云フ

大久保利通文書卷二

三八 中山中左衛門への書翰 文久三年正月九日

【按】江戸ニ至リ春嶽容堂等ニ遊説シタル情况ヲ藩ニ報シタル
 モノナリ

京地之御模様近々形行申上越候間相達候筈と奉存候私事舊臘廿五日晚景
 京地發足仕候處時分柄之事にも有之殊に一橋公其外上京之大小名諸家女
 性方通行毎日々引も切れを案外遲着より漸去三日出府仕候然共吉井中
 助中途より大早よて差立候間二日早目着より

關白様御内書は一日早目に越公に相達候私着直様春嶽公容堂公に相伺候
 處四日晚越邸に罷出候様との御事にて翌晚伺候の處兩公御揃にて拜謁被
 仰付篤と形行申上候様御意に候間

關白殿下

宮之御内意云々且内實は

三郎様御趣意云々の旨始終の曲折打明し具に言上御建白の御書付も御覽に入候處

兩公共に至極御尤の御趣意不堪感服との

御沙汰にて御座候御建白御書付之儀

殿下より御渡

兩公へは入御覽候様 御沙汰に候思召も如何と恐入候得共詰る處差知れ候譯故初に打明し候方屹と可然存込候間如斯之取計仕候何れ

兩公厚く御談判之上有無之御答可被成との御事よて當夜は退出致候年始之儀にも有之彼是御延引相成漸々昨日より今日までに御決議相成候段々六ヶ敷内情も有之晝夜となく 兩公へ伺候次第は追々可申上候
一御決議之次第は上洛御延引之儀至當之御議論實に

皇國之御爲隨而大樹家之御爲不容易譯にて御大幸思召候へ共何分時日差迫り物議沸騰之憂不一方此議段々京師關東之形勢熟察仕候處甚難問之譯にて

三郎様御建白通御請之筋に昨日迄は御決定相成候處藤井より一左右有之滯京之長土暴論相立不可救之勢之由云々申參り候篤と熟考仕候處右様人心の處に無理に被仰出候ては論旨至當ありと雖も一利を起し一害を生すると申様の事も難圖且亦薩之建白に依り如此と一同異說申觸候ては彼是故障可有之存候間屹と趣意を變し昨夜前越邸へも伺候 兩公御揃に候間尙又建白仕候處御評議之趣俄然と相替候依之大樹公上洛丈は被爲在候筋にて大小名豫參丈を早々御差留め利害得失を得と御示諭各武備磨勵之儀攘夷之基本に候間先々自國之守禦を肝要に致候様不日に

朝命相下り候様且亦大樹公上洛二月七日御乗船之御窮りに候處何分に

も
三郎様御上洛以前に御談合と申す處時日無之^まかし夫れを於關東御延引之事何共御心配之^ま内情且對
京師此方より延引と難被仰道理故何卒三月初旬にても^まはしの御延引以

朝命被仰下候へは内實は大幸に思召候左候へは春嶽公は 御召の 命を被爲得候て御上京相成候は、假令
三郎様二月二十日頃に御着京相成候ても寛々御談判之間合有之實に無此上大幸に思召候に付其筋篤と相合周旋いたし吳候様にとの御事に御座候依^あ今日發足仕候筋に御受申上候次第に御座候^まはし御延引と申す譯は格別人心に相拘り候程の事にも無之たとひ相拘り候ても暫時の事候間害を引くと申事には至り申す間敷尤此丈之事は随分 朝決も出來候譯と奉存候とうも御趣意通に不參甚遺憾之至奉存候へ共前條之次

第にて不得止譯に付其中策を取り候事に御坐候

一容堂公には明十日御乗船にて御上京之賦に御座候是は別段御召の

勅命相下り不被得止事に御座候其譯は

勅使三條公長土之暴説に酔ひ越前は因循説と申す事を頻に御建白何れ

容堂公を御召有之度由之御事に御座候就^あ容堂公を暴説に引き入候

内意可有之畢竟^ま長土之暴説家とも尻を推候事に相違無御座候何^ま

三郎様^まと御上京無之内に何とか一事を起し候一計も有之候半右之趣

篤と容堂公へ御議論申上候處己れ所存は何様の

朝命を被下候ても一存にて御受申上候譯は無之何れ春嶽公三郎公御上

京之上及談判御答可申上趣を以寸歩も動搖いたし候含は無之候間懸念

いたし吳ましく此節上京は不容易場合故屍を京地に曝し候決心之段も

御沙汰とも有之尤 君側へ兩人正義之者有之^{乾泰助小實}に純良之者に

て涙をふるひ必死に相成候君臣さすか殊勝に見受候同藩にして京師に

ある土人は暴を唱候譯大に内情も有之候事に御座候上京さへ相成候へハ土人の暴を窮て壓倒するとの思召に候

一前條之次第ニ付春嶽公容堂公願くは一日よても早目に御上京被下候様吳々申上越候様御沙汰ニ御座候

一今度の御上京々實ニ不容易御大事之御時宜ニ御座候自ら思召の御旨も可被爲在候得共實地之形勢見聞仕候へは何れに治り付候哉迎も愚眼之及所ニあらず就てハとうそ十分の威儀を被爲調御上京被爲在度奉誠願候屹と一藩を固め凜然として不可犯之氣有之初より諸藩を壓制するの御策偏ニ所仰候

一私事今日發足京地御用相濟次第には奉命之事候へは是非御中途迄ニても駈け付候含に御坐候只々心せきて事不延殘恨不少候御推察可被下候

右之趣町飛脚を以早々御問合申上候少よても模様決し次第ニは御注

進申上候折角奔走仕候へ共別條之形行ニて不得止候段々委事申上度許多の事件にて候へ共先つ要目迄早々如斯御座候達
貴聞候儀共以御賢慮可然御取計奉願候別に足輕飛脚差立候條爲念申上越候以上

正月九日

大久保一藏

中山中左衛門様

【解説】利通ハ是ノ日江戸ヲ發シテ京師ニ到リ直ニ近衛關白及ヒ青蓮院宮ニ謁シ幕府ノ事情及ヒ春嶽等ノ意見ヲ復命セリ

三九 中山中左衛門への書翰の別紙

文久三年正月

(大久保家藏)

【按】本書ハ次ニ掲クル正月九日附中山宛書翰ノ冒頭ニ「昨日迄ハ別紙通御決定相成候間早々御注進申上賦ニテ相認置候」トアル別紙ナリ内容ハ其後評議替ヘニナリシモ事件ノ經過參考ノ爲メ同封セシモノナリ

今般

叡念之御趣云々

關白様

宮様 御内意詳悉御拜承

天朝幕府之御爲不容易 思食ニ春嶽公容堂公深難有被奉存屹度御請相

成御禮申上候様云々

一容堂公義

關白様御内書之御趣ニ付御用往復迄ハ御上京御延引被成筈候得共
表向 御召之奉 命相成候得人心之折合甚六ヶ鋪内情有之推御延
引有之返密議ヲ破リ候憂も有之不得止來ル十日御乗船ニ上京有之
候事

一容堂公御上京相成直様

大樹公上洛御延引之

勅命被下候ハ、早々關東下向ニ御盡力有之候事

一勅命被下候ニ就テ眞之

叡慮ニ願クハ一橋公容堂公御參内ニ御直ニ 御達有之一橋公ハ
御巡見之一條且攝海之警衛も有之候得下坂いし尙亦手當向行候
様可致容堂公ハ關東下向いし

勅命之趣相傳周旋いし候様被仰出度候事

但

容堂公再御上京之義去期日ヲ定メ春嶽公一絡ニ上京相成候様

御召有之度事

一大樹公上洛之義既ニ御治定ニも相成一同目當ニもいし就中滯京之大
小名群集ノ事候得一應物議之憂ハ一方義ニ候得右鎮撫之御一策
有之度趣ニ 御召ニ依リ上京之列侯一同參内被 仰付今般攘夷被
仰出候上々大樹公上洛有之候云々之害有之候ニ付御延引 御達相

成候就るも各御 召ニ應し上京丹誠ヲ抽候志ハ至極
叡威ニ

思食候雖然徒ニ滯京いふし候義無益之譯候ニ付只今ニ至るも各國武備
磨勵第一攘夷之基本當時之急務ニ候間早々歸國いふし必死ニ守禦之術
行届候様可取計旨反覆御示諭有之度事

一大樹公上洛御延引之義武備嚴重行届候様ニ与之 思食ヲ以被
仰出候譯ニ候得也

大樹公御名代として一橋公沿海之國ニ當時相調候丈之武備御巡見蒸氣
船ニ有之候様被
仰出度事

但本文通被 仰出候得も滯京之列侯歸國ニ付るも人心折合可然
大樹公御名代ニ有御巡見ト申譯ニ候得も沿海之大名自ら國無之候
も不相濟譯ニ候事

一右通表向御請相成候得も第一容堂公

御召之

勅命且御延引之 御内意表裏御奉 命之筋相立屹度御兩全之御處置可
有御坐事

一前件通御請相成候得共何分不容易重大之事件ニ付容堂公御上京有之直
様御延引被仰出萬々一人心之居合附兼變害ヲ生候場合ニも暫時御差扣
ニ有春嶽公三郎公御上京之上篇と御議論ヲ被盡愈御延引相成可然御見
留相付御決議相成候ハ、其節被仰出候様若上洛不相成候も不宜与之事
候得も三月初

御上洛相成候様

一右様兩説ヲ以

關白様

宮様へ及建議候ハ、屹度暫御見合之方ニ可相成儀ト奉存候只今ニ相成

候るも無左候る不相濟ト奉存候

一右通譯ニ相成候ハ、

大樹公御上洛三月初と申處へ只今ハ御内決被爲在度奉存候

一御獻石

皇子

皇女兩度

行幸ニ次第被

仰上ニ義容堂公

御奉 命ニ御上京被爲 在度奉存候

一何をニ御決定相成候るも諸大名豫參丈ハ早々武備充實ニ譯を以御差留相成候様

一右一條ハ宇和島老公因州公其余長岡杯尙亦談合有之候ハ、如何様共御處置ニ附様可有之奉存候

四〇 中山中左衛門への書翰 文久三年正月九日

【按】此ノ書ハ藤井良節ヨリ再ヒ京師ノ狀況ヲ報セシヲ以テ前日ノ決議ヲ變更シ其ノ事情ヲ別ニ認メ前書ト同封シテ送リシモノナリ

昨日迄ハ別紙通御決定相成候間早々御注進申上賦ニテ相認置候へとも亦々左ニ通御評議相替候町便を以形行申上越候間早目に相達可申候得共尙爲念飛脚差立申候別帋は最早無用之事ニ御座候得共昨日迄の形行御覽之爲め其儘差上候

一別紙通昨日迄御決定之事候得共昨日藤井良節別紙書狀到來色々混雜之模様にて不堪心配趣に申遣實ニ長土之暴論可惡殊ニ薩の名を立候義憤恨之次第に御坐候是は今般 御建白之御趣意相洩候る之譯ハ無之筋に候得共一體土越ニも薩の建議相立且

宮様の御借り人之一條等實は妬心より起り候譯ニ可有之終

大樹公御上洛御延引被仰出候々愈物議沸騰いたし却て害を引き候様之事も難圖且は薩の建白よりして如此と尙以因循とか何とか異説を生し候儀ハ案中にて天下之公論に候へは少しも不差構譯とハ乍申亦嫌疑に遠り候ことも無御座候而夫一人之上とは違ひ 御名望も相拘候義尤も是は一藩之議を避くるのみに無之御當地之論を承候處暴論家多く中よも六ヶ敷勢之事ニ御座候依之昨晚越邸に伺候
御兩公御揃にて色々御議論も有之且及建議候譯も有之候處御評議之上左之通御決定相成候

一大樹公上洛三月初旬ニ迄はし御延引以

朝命被仰下候様當分よてハ二月七日御乗船ニ蒸汽船より御上洛と申すに御窮り相成候左候ては

三郎様二月廿日頃よも御上京ニ候得々

御上洛前春嶽公容堂公篤と御談判と申義不被爲調々かしから於關東

御延引難被成内情も有之殊に被爲對

朝廷今更御延引と難仰上譯候間何卒

朝議を以被仰下候様有之候得々別々御大幸ニ候間其筋相含周旋いたし

吳候様よとの御事ニ御坐候春嶽公に々 御召之命を御待

三郎様御上京御一緒頃にて御上京被成度との御事ニ候

一豫參之大名ハ自國守禦之術攘夷之基本に候間篤と

朝廷より御示諭有之御差留被仰出度事

一容堂公にハ明日御乗船にて蒸汽船にて御上京之賦御座候是は

御召之命相下り候仔細ハ三條様長士之暴論ニ御迷ひ越前は因循説と申事を主張し別紙藤井書狀之通ニ御座候之りし容堂公に々何様之命下り候共三郎様春嶽公御上京之上からては御一人よて御受難相成趣被仰上屹度三條公之説に動き候存慮ニ無之至極之御決心之筋ニ相見得候於京師宇和島老公因州公肥藩長岡良之助と餘程宜敷由ニ御坐候宇和島

長岡は藤井拜謁致候處至極

三郎様の御依頼よて議論少しも異議は無之由ニ御坐候依て容堂公も此御方の御談判可被成との御趣意に御座候

一私事も右之趣相含今日發足仕候 御趣意に參兼候得共前條之次第不得止候暫時之御延引被仰出候義且豫參之大名御差留之義ハ

朝議も別段六ヶ敷譯は有之ましく奉存候何分御用濟次第には早々駈下り候含ニ御坐候

一容堂公春嶽公より宜敷申上越吳候様且御上京之儀早日偏ニ御願申上吳候様にと之御事ニ御坐候

一御發駕御日限もはや御窮り相成候半町便よりも申上候得共此節ハ實に不容易御場合ニ候間威儀十分に被爲調御上京被爲在度奉願候

右之趣町便よりも爲念飛脚差立申上越候間達
貴聞候儀共可然御取計可被下候委事申上度儀のみ御座候へとも出立

に付混雜いたし要詞まで申上候何れ京地より尙亦可申上候以上

正月九日

大久保 一 藏

中山中左衛門殿

【解説】利通ノ遊説ニ依リ春嶽容堂モ亦久光公ノ意見ニ同意セシト雖モ當時幕府ニ於テハ將軍上洛ノコトハ既ニ確定セシコトニテ又一橋慶喜モ既ニ西上シ加フルニ藤井良節ヨリ京師ノ形勢日ニ非ナルヲ報セシヲ以テ利通ハ將軍上洛延期ノコトハ到底行ハレ難キヲ知り臨機ノ方法ニヨリ將軍ノ上洛ハ輕装ニテ之ヲ決行シ諸侯ノ出京ヲ止メ慶喜春嶽容堂久光公等京師ニ集會シ以テ國是ヲ決定スルノ外ナシトシ春嶽容堂ニコノ意見ヲ具陳セシカ兩人モコレニ同意シタルナリ又當時土藩ハ武市半平太等藩主山内豊範ヲ奉シ長藩士等ト共ニ三條等ヲ推シテ急激ナル攘夷說ヲ唱へ朝命ニ依リ容堂ノ上京ヲ計リシモノナ

リシヲ以テ利通ハ大ニ容堂ノ上京ヲ危フミ其決心ヲ確メタル
ナリ別紙ノ藤井良節書狀ハ之ヲ佚ス本書冒頭ノ「申上賦」ハ「申上
ツモリ」ト讀ム

四一 小松帶刀への書翰 文久三年三月廿四日

(大久保家藏)

【按】以下二通ハ在藩ノ利通カ久光公ニ扈從シテ上京セシ小松
ニ贈リシモノナリ

三郎様益 御機嫌克兵庫御着船ニテ猶御都合能被爲在 御京着候半恐
悦御同慶奉存候於御當地

太守様奉始

御子様方 御姫様方被爲揃益御機嫌克被爲遊御坐御同然奉大慶候兵庫
御着船之御左右以來御模様不相分日々奉待兼候

御着涯之御都合如何之御事ニ被爲 在候哉

御配慮ハ勿論 尊公様方之御心配不一方御義与實ニ忘寢食奉親察候何

卒

御吉左右伏々奉願候何分ニモ這回ニ無御餘義御申立ヲ以御歸國被爲
在候處吳々ニモ奉念願候事ニ御座候志々目出立后御當地何も相變候義
無御坐下人氣も別々靜謐先々大幸無此上御儀ニ奉存候御仁政被施設候
故御臺場之御修築も上下西田町々男女日々五百人餘ツ、御加勢夫ト唱
へ夫立いゝし候間不日して成就相成實ニ難有御事ニ御坐候諸御役場之
處先ツハ格別弛張之廉も無御坐候得共別段

御立后跡戻り候与申程ニも不至仕合之至御坐候尙此上之處折角

御趣意不立戻候様ニ与晝夜心痛仕候事ニ御坐候大略之形行ハ中山方へ
も申越候間何卒御聞取可被下奉頼上候

一 御立前承知仕居候國分新城御築立之義

太守様 御先越ニテ被遊

御覽大抵御治定相成地面引并シ方として兩日中郡奉行被差越候賦ニ御

坐候御屋形御造立之處ハ未畫圖面も成就不相成候得共先ツ大抵之處
て新御造立有之夫ニ華倉御茶屋御引直相成候へハ十分之御一殿出來可
相成候現ニ地形彼は見分いぬし候處實ニ當時世ニおひてハ寸時も夫成
被召置候場所ニ無之要害堅固ハ勿論海岸一里程を隔候上一里位之淺瀬
有之假令數千之軍艦寄來候共枕を高うまゐる之要地よて東南之眺望と比
競するに類かく自然ニ陽氣を含蓄いふし實ニ無申分候間屹度御手被召
附度義与奉存候就ハ

御姫様方御迦場之義蒲生地頭假屋之方へ中村御茶屋御引直之筋

思召も奉伺居候處國分地頭假屋之義一體手廣よも有之候上右通之場所
柄殊ニ地頭假屋御圍續キニ往古

龍伯様之御殿跡有之犬追物場之古地其外聖堂跡かと相残り石垣樹形等
之惣構へ其儘手ヲ下さぬして被相用候間江戸澁谷御殿廻りニ亦も御引
直有之候得と忽然一字之御城下出來いぬし候府ヲ移事ハ中々不容易

義よて急々御取起しハ不相叶候得共只今ハ漸ヲ以成之御賦ニ御手
相附度頻ニ所願ニ御坐候左候得と中村御茶屋之義も國分地頭假屋之方
ニ被引移候方別之御良計且國分蒲生一時ニ御手相附候義も餘計之
御入價ニも被爲及當時と不可欠之事与ハ乍申四方ニ土木之費も起り候
間先ツ右通國分之方ニ相圓り候ハ、寸分ニ亦も可然譯与奉存候
御姫様方御迦し被爲在候亦も十分之要害相備り旁可然其筋ニ

太守様

思召も 御治定被爲在候中村御茶屋御引直之處ニ御手相附申候間

尊公様宜鋪御汲取被下御執成被爲在候處平ニ奉頼上候之し別段

御深慮も被爲在候御事よも御坐候ハ、早々御申越被下候處伏る奉願候

跡越ニも可相成候得共蒲生之方ハ御手相附候處ハ如何様共致方可有御

坐奉存候何分ニも

思召御伺被下候處宜鋪奉頼上候

一文武兩館御造立も追々相促し随分不遠成就可相成奉存候

一御歸國之節細島

御着船ニ亦日州筋

御通行 御着城之段被

仰出候御趣奉承知候形行中山方へ申越候ニ付是亦

御聞取可被下候

右今日飛脚被差立大畧之形行奉申上越度尙亦委細之次第ハ蒸氣舶便
より申上越候様可仕候ニ付左様思召被下度奉願候以上

三月廿四日

大久保 一 藏

帶 刀 様

【解説】是ヨリ先利通ハ歸藩シテ京都及ヒ江戸ノ狀況ヲ具ニ復
命セシカ久光公ハ愈上京ノ意ヲ決シ是ノ月四日小松等ヲ隨へ
テ上京ノ途ニ就キ十四日着京スルヤ直ニ近衛前關白父子中川

宮鷹司關白慶喜春嶽容堂等ト相會シ時事ニ關スル意見ヲ陳述
スル所アリシカ攘夷論優勢ニシテ朝廷ニ於ケル四圍ノ狀況ハ
果シテ非ナリシヲ以テ公ハ十八日退京歸國ノ途ニ就キタリ此
ノ書ハ公カ細島ヲ經由セラル、報アリシヲ以テ次ノ書ト同時
ニ細島ニ發送シタルモノナリ

四二 小松帶刀への書翰 文久三年三月三十日

(大久保家藏)

【按】此ノ書前書ト同封シテ細島ニ發送シタルモノナリ

三郎様益御機嫌克被爲遊御滞在恐悅御同慶奉存候伏見京都方之御問合追
々相達拜見仕候去ル十四日

御着懸ケ 陽明家

御參殿被爲在

中川宮様關白様一橋公容堂公御揃ニ亦天下之 御公論ヲ以無御遺漏 御
建議被爲

在候得共例之御不斷ニ終ニ被相行兼候由實以千載之遺憾共可申候得共
是亦時世之然らしむる處偶然あらざる之運數ト奉存候併暫時より共
御上京被爲 在的當之

御確論相立爲

天朝 御盡忠之

御誠意ハ天下後世ニ亘リ赫々然々る之

御盛事与奉存候此より至ル根據ハ攘夷

勅諭之一事ニ誤リ候譯ニ

三郎様

御趣意ニ戻ル之發起ニ實ハ其以來之

御建白 御盡忠之件々々不可行致知而止を得給ハざる之

御赤心ニ御涌出あらざらば候御義ト可奉申候得と乍恐

御分上之處ハ至せりと奉存候間今日成らざるを見而遺憾トをるき譯も無

之義ト奉存候幾重ニも可恨ハ攘夷之

勅命を誤り候一義ニ御坐候此上も今一時之一機會を

御見合大舉之處奉希望外無御坐候就るも今度

神速

御歸國被爲 在候義國家之

御大幸而已からば天下之大慶ニ御坐候

一筑前御借入之 御供船も實ニ存外之次第ニ言語同斷之奴原共ニ御坐

候則昨日

御使として奈良原始被差越且御道具等差廻候付追々到着可仕与奉存候

何分ニも偏僻之地に數日之

御滞在

御窮屈 御不如意之程實以恐懼至極奉存候最初ハ全ク右様御供船間違

之事共ハ存も不寄譯ニ廿四日五日ニ

御立可被爲 在與奉存尤

太守様ニも昨日蒸氣船ハ國分迄

御出之 御賦ニ候處右之一左右相達 御延引相成候時宜ニ別被遊

御案煩候御事ニ御坐候之し表方大口筋通行之人數も昨日加治木通行之段承申候間追々着ニ三日四日ニ

御立可被爲調與奉存候

一 足輕三十人

一 御鐵砲十五挺

右表方志岐之とへ承候處

御召船ハ積入有之ましく与之趣承候間爲念今日差立申候

一 蒲生地頭假屋へ中村御茶屋御引直國分新城一條御立前承知仕居右之趣等奉申上度去ル廿四日飛脚差立候賦にて別封認置候處細島

御着船之御左右相達候付取止其儘書狀召置候ニ付今更不用ニハ御坐候得共差上候間御旅寓之御閑暇ニ御覽被成下度奉願候左候ニ國分地頭假屋へ中村御茶屋引直之一條等最早中村ハ解崩シ方ニ打立居候間萬々一思召も被爲 在候ハ、早々御下知可被成下候幸此度ハ國分へ

御泊ニ御坐候間畫圖面等持參之含ニ御坐候新城も地面引直し方先日ハ取付居申候別番通之次第にて此節

御覽被成下候ハ、決之乍恐

御異論ハ被爲 在ましく奉存候何卒宜鋪御汲取

御伺置被下度奉願上候

右昨日形行奉申上度奉存候處急速之事ニ間ニ逢不申候間態と申上程之御用筋ニも無御坐候得共彼是取交早々如此御坐候何も近々拜謁之上奉申上候以上

三月卅日

大久保 一 藏

帶 刀 様

【解説】前書及ヒ本書中ニアル國分移城ノコトハ當時生麥事件ヲ以テ英艦來襲ノ虞レアリシヲ以テ斯ノ如キ計畫ヲナセシカ
七月英艦ト戰フヤ移城ノコトハ大ニ士氣ニ影響アリトノ説起
リ遂ニ中止スルニ至レリ

四三 長崎御付人への通達書文久三年四月十七日

【按】長崎遊學中ノ伊地知彌平太へ心付金交付ノコトヲ通達シタルナリ

金拾五兩

伊地知彌平太

右ニ映學并蒸氣器械學稽古方として出崎被仰付置候處段々及入價殊ニ兼テ困窮ニ由候付右ニ通御心付被成下候條御藏金之内拂出可被相渡候此段御用を以申越候以上

四月十七日

大久保 一 藏

長崎御付人

四四 久光公上京に關する意見書文久三年六月 (大久保家藏)

【按】久光公カ上京ノ内勅ヲ受ケラレシニ就キ建言セシモノナリ

宸翰ヲ以

御召之内

勅被爲蒙候義古今希有ニ御冥加實以難盡言語御儀ト奉雀躍候就ルモ不日御上京御請御禮被爲

在候義御至當ニ御坐候得共兎角時機ニ應し始終ニ御大策被爲立候上からテハ假令

勅命といへ共艸卒ニ

御舉動ヲ以